

社会科学 ドキュメンテーション

—— 社会思想史研究と書誌 ——

水 田 洋

一橋大学社会科学古典資料センター
Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

社会科学ドキュメンテーション

—社会思想史研究と書誌—

水 田 洋

まえがき — この小論は、つぎのような構成をもつ。まず、1982年11月19日15時00～16時40に、一橋大学社会科学古典資料センターで、第3回西洋社会科学古典資料講習会の一部としておこなった「社会科学ドキュメンテーション」の講義を、録音テープによって、議論の一貫性・整合性をいちじるしくそこなわないかぎり、補足説明をくわえて復原し、ついで、注記のかたちで、当日、輸送能力の不足によって実物をしめすことができなかった文献、あるいは時間の不足によって言及できなかった文献についての説明を追加する。そのあとで、当日は若干の例をあげることはできなかった1801年以降について、ややくわしく補足する。

I

社会科学ドキュメンテーションというきわめて一般的な題をつけたのは、なにをしゃべっても羊頭狗肉といわれないようにという謀略なのですが、なにをおはなしするつもりかといいますと、レジュメともいえない簡単な箇条がきをしておきましたように、ぼくは社会思想史の研究者でありますので、まず社会思想史の研究上、ビブリオグラフィーがどういう意味をもっているかということ、これが序論です。それから、まだ書誌そのものにはいらないのですが、固有名詞についてです。固有名詞の発音、それをかなになおすことは、図書館にも書誌にも、直接には関係がないでしょう。しかし、しばしば誤読が混乱をうんでいるので、余談として申しあげておきます。そのつぎに、書誌の書誌、書誌についての情報ですね。それに匿名著者辞典。こういうものはご存じのこととおもいますが念のために。それから、18世紀についての例示とかきましたのは、ここにもってきました『社会科学年表 第1巻 1401年-1750年』¹⁾、これはここにおいでの方の大部分がまだお生れでない、いや出版はそれほど昔ではありませんが1956年で（作業をはじめたのは1947年）、出版した同文館がつぶれたために、中絶していました。で、このあとをやるために、材料をあつめてきたのですけれど、じっさいにだすことになると、1751年からやるよりも、18世紀全体をまとめる方がいいということに気がつきました。それで、この1701-1800年²⁾というのをつくったのですが、これをつくる過程でつかった書誌について、おはなししたい。それからさいごに、ここにはかきませんでした、いくつかのめずらしいビブリオについて、おはなしします。（なおレジュメのおわりにI-(3)の例となっているのは、III-(2)つまり18世紀のイギリスについての例示ということのまちがいです）。

さて、はじめにかえて、なぜ社会思想史の研究に書誌が、どういう書誌が、必要になるかといいますと、レジュメにかいておきましたようにまず原資料をさがすため、つまりリトロスペクティブな作業があります。社会思想史の原資料、原本といえば、たとえば、アダム・スミスの『国富論』とかホッブズの『リヴァイアサン』とかなのですが、そういうものがあることは、もうわかっています。こういう一流品はわかっている、二流、三流品はわかっているということが、書誌の必要を生む。あるいは一流品についても、こまかくいえばいつ初版がでて、それがどのようにあとの版にうけつがれたか、あるいは変更されたか（出版禁止や削除や地下出版や注釈版など）ということになれば、書誌が必要にな

ります。ですけれども、ぼく自身の感じでいえば、原資料をさがすために書誌をつかうのは、大体二流、三流のばあいです。

このことは、書誌というものが、たとえばホブズならホブズの著作目録というだけではこまる、ということの意味します。なるべく網をひろげたもの、できれば、イギリスをやっているんだったら、ブリティシュ・ライブラリのカatalog全体をよみたいのです。もちろん、せいぜいのところひろいよみですが、それも容易なことではありません。アダム・スミスの蔵書目録³⁾をつくるときに、あれをかなりよんだことがありますて、もちろん途中でいやになったこともあります、けっこうたのしかったという記憶もあります。で、そういうことのなかから、いままでしられていない、一流品とおもわれていないものを、ひろいだすわけです。アダム・スミスに関係のある例でいいますと、親友のヒュームが死んだとき、スミスは、遺言によって出版されたヒュームの自伝に、序文をかいたのですが、これが匿名のパンフレットによって攻撃されました⁴⁾。ヒュームという人は、無神論者として非難されていまして、そのためにエディンバラ大学の教授になれなかったほどなので、そのヒュームがやすらかに死んだなどとかくアダム・スミスも、無神論者にちがいない、というわけです。ヒュームについては、つぎのような伝説があります。あるときかれが、エディンバラでぬかるみ——というより沼か池でしょう——におちて溺れそうになり、たすけをもとめると、女性が近づいてきて、名前をききました。「デイヴィッド・ヒュームです」「お前さんがあの無神論者ヒュームかい、たすけてもらいたかったら、そのまえにお祈りするんだね。それがいやなら死ぬがいいさ」「いいえ、おくさん、キリストは汝の敵を愛せよとおしえました。」この話は、ヒュームのウィットをしめすものであると同時に、とおりがかりの女性が、名前をきいたとたんに無神論者とよぶほど、そういう人物として有名だったことを、しめすものといえます。

攻撃のパンフレットをかいたのは、ジョージ・ホーンといって、あとで、ノリッジの司教になった人で、当時はオクスフォードの *vice-chancellor* といえますから、副学長でしょうか。ところが、これに対してヒュームとスミスを擁護する、やはり匿名のパンフレットが出版されました⁵⁾。著者はプラットといい、国教会牧師、俳優、本屋というように職業をかえた人で、パンフレットをかいたころは、フリーの文筆業者とでもいえるでしょう。それで、ホーンやプラットについて、スミスとヒュームについてのパンフレットだけでなく、ほかの著作をBLのカatalogなどでしらべてみますと、プラットが『同感』⁶⁾というながい詩をかいて、これが10回以上も版をかさねている。『人間性』⁷⁾というものもあります。ホーンの方も、『論集』⁸⁾——といってもオクスフォード大学での説教集ですが——のなかに『市民政府の起源』というのがあります。このうち、『人間性』というのは、みたこともありませんし、ほかのふたつも、まともに読んではいないので、おおきなことはいえないのですが、とにかく『同感』といえば、アダム・スミスの道徳哲学の中心概念です。ですから、それを読むとスミス解釈のあたらしい道がひらかれるかもしれない。「かもしれない」というのは、そうでないかもしれない、読んでもむだかもしれない、ということで、どうせ二流のうずもれた人物ですから、歴史上のこっていない。ほりだしてみなければわからない、ぼくちみたいなのです。思想史の研究というのは、このぼくちがたのしいんだ、といってしまえばそれまでですが、ぼくちばかりやっているわけではない。オーソドックスの訓練をやっていないと、ぼくちができないということもあります。とにかくそういうことで、小物をさがす。この、小物をさがすということは、アメリカでよくあるように、いわゆる「独創的」な、人のやらない研究を奨励するために、だれも手をつけない、つまらない人物（つまらないから手をつけない）についての、つまらない研究を生んでしまうことにもなりますが、そういう危険があるにもかかわらず、ほりおこしをすすめる必要はあるわけです⁹⁾。

原典をほりだすための書誌というのは、いま申しあげたようなことなのですが、つぎは研究史をしる

ための書誌です。じつは、いまのこと、つまりスミスに対する非難と弁護がすでにスミス研究史なのですし、それからすすんで19世紀70年代のドイツになりますと、アダム・スミス問題というのがおこります。こういうものをやはり、書誌的にたどっていかねばならない。しかしこれはたいへんむずかしいことで、たとえばBLのカatalogのアダム・スミスのところに、かれをとりあつかったすべての研究がまとめてあるわけではない。第一、どここの国のナショナル・ライブラリでも、自国中心ですから、外国の研究なんか二の次です。だから、さっきいったプラットのばあいのように、ぐうぜんの出会いによるしかないこともおおいのです。もちろん、すべてがぐうぜんにたよっているわけではなく、主題書誌は主題が事件であろうと人物であろうと、それについての研究をふくむのがふつうです。

三番目が、研究状況を現時的につかまえるための書誌ですが、これはなかなかむずかしい。といいますのは、研究の最先端は、書誌がでるまでには、さらに先にすすんでしまっている。まだ思想史のばあいはいいんで、理科系の人にききますと、だいたい、論文になったときはもうおそい、つまり研究はもっとすすんでいる、だからプレプリントが勝負なんだということです。そのうちにプレプレプリントなんていうのがでてくるんじゃないかと、ひやかしているんですが、それがプリントされ公刊されて、書誌に採録され、書誌が公刊されてからでは、もう原文を利用する必要はないわけです（しかも、科学史の対象としてはあたらしすぎるでしょう）。思想史のばあいは、それほどのことはありませんが、やはり書誌としてでてきたときは、研究の最前線はもっと先にある。もちろん、あたらしい研究がいつもいちばんいいわけではありませんし、いまのように、業績点数主義が支配的になり、各大学が無審査掲載の紀要をどんどんだすという状態では、時間的に最先端の研究が研究の最先端ではないのです。ぼくはそういう抜刷をもらって、何回か、こんなものは活字にすべきではなかったとか、なんでも書けばいいっていうもんじゃないとか、お礼状に書きそえたことがあります。

しかし、書誌というものは、研究者にとっては、選択的であるよりは網羅的であることがありがたく、へたな選択をされたら大事なものをとりにがすのではないかという、おそれがつねにあります。選択的な書誌は、選択の規準が明示されていないとこまるのですが、それをするとはもう研究者の仕事なのです。分類でさえも、ひとつの選択ですから、しばしば研究者にとっては、ありがた迷惑なのです。これについてはまたあとでのべます。

で、書誌というものは、その性質上リトロスペクティブになってしまい、現時的で網羅的な書誌を、ほんとうの意味で現時的なものとしてつくることは、たいへんむずかしい。これはどうしても、出版目録、入荷（小売店の）目録とか、あたらしい雑誌論文の脚注（これもすでにリトロスペクティブ）とかによらなければならないのですが、とくに雑誌論文からひきだすには研究者としての目が必要になります。逆に、参考文献の注だけみて、それをつかった研究を判断する人もありまして、いくらかりスクはありますが、たとえば、この研究は、このあたらしい文献をつかっていないから、おくれているとか、ふるい文献でも基礎的なものをつかっていないから、研究史をちゃんとフォローしていないとか、あるいは、この段階の文献しかつかっていないから、水準もその程度だろうとか、判断するわけです。ぼくの経験した例をあげますと、スミスの同時代にジェイムズ・アングスンという人がいて、ある大学院学生がその差額地代論を研究して論文を書きました。ところが、そのなかにアングスンの伝記があって、それをブレンタノによって書いているんです¹⁰⁾。ブレンタノのどの本かは明記してないんですが、とにかくもとがドイツ語ですから、アバディーン大学が *Universität zu Aberdeen*, ランズダウン侯爵が *Marquis von Lansdown* となっているのをそのまま、文中に挿入している。なぜDNBをつかわないかとききましたら、そんなものがあることをしらなかったというのです。イギリスの思想史をやるのにDNBさえしらないとすれば、できあがった論文のレベルは大体判断がつかます。この話は、つかっ

ている文献からその研究のレベルがわかるということですが、書誌的な仕事としては逆に、第一線の研究業績のなかから、そこでつかわれている文献を、重要なものとしてひろっていくわけで、それができない、ひろうべきものがなにもないならば、その研究は第一線のレベルではない、ということになるわけです。

それからもうひとつ。Iの(4)にはいります。これは、いままでおはなししたと直接には関係がないのですが、本というのは思想が表現されたひとつの形態です。それが弾圧されることもあれば、ヒュームの『人間本性論』のように印刷機から死んでうまれた、つまりまったく売れない、ということもあります。逆にいえば、出版業者がどういう本をだすかが、ひとつの思想活動であるわけで、たとえば宗教改革のときの出版なんかがそうでしょう。そうして、その本を誰がどうして買って読んだかということも、思想の需要・消費形態をあらわす。18世紀のスイスのバーゼルで、イギリスの本がたくさんでます¹¹⁾。翻訳もありますが、原語のままのもあって、それがライン川をつかって、下流のドイツとフランスにながれてむわけです。たとえばヒュームのように、無神論者とされて、おそらくドイツやフランスでは弾圧されていた著書が、このルートで普及したということも考えられます。

もうすこし微視的にいえば、出版者が著者をはげまし、あるいはこきつかい、つぶし、というようなことがあるわけで、18世紀についてみると、このころはちょうど、文筆業が職業としてなりたちはじめたので、職業的文筆業者、ジャーナリストあるいは売文業者といきましょうか、そういう知的商品生産者がでてきました。かれらは、封建的な支配者のごきげんをうかがう必要がなくなったかわりに、金のため、生活のためにはなんでも書くようになります。ですから、ある問題について自分は賛成でも反対でもうまく書く、どちらでも金をたくさんくれる側にくわわるといって、売りこむわけです。まだ大衆的読者という市場がないので、封建的な支配者からは自由になったものの、政財界の有力者に、貨幣をつうじてですが、従属しなければならないのです。

こういう知的生産のありかたをするために出版事情の研究が必要になってきます。日本ではなかなかでてこないんですが、たとえば国際18世紀学会では、大会でしばしば、出版についての部会がつくられますし、図書館関係の雑誌にそういう論文がでることもおおいようです¹²⁾。18世紀学会のエール大学での大会で聞いた話のなかに、オクスフォードのボドリアン・ライブラリの館長が、ローマ法王庁の禁書目録を逆用して、そういう禁書をあつめた、というのがありました。権力によって消されようとするものをあつめたわけですから、われわれ後世の研究者にとってはたいへんありがたいことで、ナチスの弾圧から社会主義文献をすくいだして、アムステルダムの社会史国際研究所の基礎をつくった、ポストフムスも、おなじようなことをしたわけで、おなじように研究対象になっていいはずです。戦後の日本でいえば、『チャタレー夫人の恋人』の翻訳を図書館にいれる、というようなこともあります。そのまえにも、発禁本はたくさんありますが、それを日本の図書館はどうしていたのでしょうか。

ようするに、図書館のありかたもふくめて、本というものが、社会的にどういうかたちで生産され存在したかということ、レジュメではこれにビブリオロジーなんてかってな名前をつけましたが、これはぼくがかってにこういつているだけなのでして、ビブリオグラフィーのグラフィーが表面的な叙述であるならば、ロジーはその構造の分析だ、という意味です。地理学がジオグラフィーで地質学がジオロジーであるのに対応しているかもしれません。ただし、グラフィーとロジーには、それほど厳密な対照性はないようですから、ビブリオロジーというの、あまり根拠のしっかりした名称ではありません。そういうものがあってもいいんじゃないか、というくらいでお考え下さい。

- 1) 高島善哉監修, 山田秀雄編集代表『社会科学年表 第1巻 1401年～1751年』昭和31年, 同文館。わずかながら在庫がある。
- 2) H. Mizuta, *Annals of social sciences 1701–1800*. Privately reprinted, 1982. これは, 名古屋大学経済学部附属経済構造分析資料センター発行の『調査と資料』73号(昭和56年3月)および74号(昭和57年3月)に、『スコットランド研究のための書誌』のPt.Ⅲとして印刷されたもののリプリントで, 独立のバジネーションをもつ。
- 3) H. Mizuta, *Adam Smith's library*. Cambridge University Press, 1967.
- 4) [G. Horne], *A letter to Adam Smith LL. D. on the life, death, and philosophy of his friend David Hume Esq. By one of the people called Christians*. Oxford 1777. 2nd edition Oxf. 1777. A new edition, London 1799. 攻撃目標となったスミスの手紙は, グラズゴウ大学版アダム・スミス著作集第6巻(手紙)にNo178として収録されている。
- 5) [S. J. Pratt], *An apology for the life and writings of David Hume, Esq. with a parallel between him and the late Lord Chesterfield: To which is added an address to one of the people called Christians, by way of reply to his letter to Adam Smith, LL. D.* London 1777.
- 6) [S. J. Pratt], *Sympathy, or a sketch of the social passion*. London 1781 (5 edns.). ただし, 4th, 5th edns. では, 副題(or以下)が a poem となっている(2nd, 3rd edns. は不明)。初版のフルタイトルはNCBELによる。
- 7) *Humanity, or the rights of nature: a poem*. London 1788.
- 8) G. Horne, *Discourses on several subjects and occasions*. 2 vols. 3rd edition, Oxford 1787. ホーンのこの著書はCBELにもNCBELにもなく, 後者ではホーンそのものが抹殺されている。
- 9) ほりおこしの例をもうひとつあげよう。それは, *A letter from Governor Pownall to Adam Smith, ...* London 1776. の著者パウナル Thomas Pownall, 1722–1805である。かれはイギリスとアメリカ植民地との合邦によって, 帝国の中心がアメリカに移動することを, かなり現実性のある問題として議論している(T. Pownall, *The administration of the British colonies*. 5th ed., 2 vols., London 1774, vol. 1, p. 171. Cf. J. Dorfman, *The economic mind in American civilization 1606–1865*. Vol. 1, New York 1946, pp. 205–6). このことを考慮にいれると, スミスが『国富論』で首都移転説に言及したのは, 合邦論を否定するためのレトリックだったという, 内田義彦説(『作品としての社会科学』1981年岩波書店)にたいする疑問がでてくる。以上のことは, 萩原正一「重商主義解体期における合邦論の意味——トマス・パウナルの場合——」(『経済科学』29-1)および「アダム・スミスの植民地論——政治思想との関連において」(未発表)において指摘された。
- 10) 西山久徳『差額地論の研究』三笠図書, 昭和37年。
- 11) Cf. Giles Barber, *Tourneisen of Basle and the publication of English books on the continent*, c. 1800. *Library: a quarterly review*, ser. 5: 15, 1960, pp. 193–200.
- 12) Cf. *Annual bibliography of the history of the printed book and libraries*. 1970–. The Hague (Nijhoff) 1973–.

II

以上は序論でありまして, 本論にはいりますと, まず固有名詞をどうよむか, どうかになおすか, ということです。図書館ではなにもそういうことをする必要はないのですが, 日常こまるわけです。どうせ, もとのとおりには表現できないのですが, できるだけ近づけようということで, これはぼくが学生時代に, アダム・スミスの『グラズゴウ大学講義』を訳していて, ラテン語を上原専禄さんにききにいったとき, 固有名詞はできるだけ原発音に近くといわれたことを, まもっているだけです。まあ, それがいちばん無難だとおもいます。プラトンもアリストテレスもキケロも, とにかく日本では, 諸外国よりも原発音に近いかな表記になっています。プレイトー, アリストートル, シセロンといわれても, 誰のことかわからないでしょう。

しかし、原発音に近づけるのが無難だといっても、なかなかむずかしいんですね。とおい国はもちろん、比較的近いところでもオランダなんかこまります。さいわいぼくは戦争中にジャワで酒をのんでくらしていましたので、日本帝国主義からぼくがひきだした唯一の利益として、オランダ語はすこしわかるようになりました。それよりも、もっと近いところ、つまりぼくの専門であるはずのイギリスがこまるのです。お手もとのコピーをみてください。そのままよめば Cholmondeley となるのがあります。Cholmondeley ですが、これはそこに発音記号でかきましたようにチャムリとよみます。つぎの Chisholm は、チスホルムでもチショルムでもなく、チザム。そのつぎの Cirencester は、サイレンセスターで、これはまっとうなのですが、ウースター・ソースの Worcester も、その近くの地名のレスター Leicester も、そのほかも、すべて ces はスになるのに、このサイレンセスターだけがセスなのです。

人名では、たとえば Malthus。これはふつうにマルサスといいますし、ぼくもそれでいいとおもいますが、ケインズはモールタスだといっています¹⁾。ケインズは、理論的にもマルサスからヒントをえたりして、関係がふかいので、かれの弟子たちは、モールタスとよぶのだそうです。このことをぼくにおしえてくれたのは、グラズゴウ大学のマクフィー教授です。まえのサイレンセスターは、バーミンガム大学の中世社会史の教授、ロドニ・ヒルトンがおしえてくれました。もっとも、ケインズの影響は、すくなくともマルサスのよみかたにかんするかぎり、しだいにおとろえているようで、BBC の発音辞典²⁾ではマルサスです。

つぎにストラーン Strahan というのがあります。この人は、アダム・スミスの『国富論』やギボンの『ローマ衰亡史』などをだした出版業者ですが、これはジョーンズの発音辞典にでていないんです。むずかしい発音ではないということでしょうか。ところが、三省堂の『固有名詞英語発音辞典』³⁾をみると、ストラーンとなっていて、BBC の発音辞典だとストローンとなっています。このくらのちがいは、エリザベスとイリザベスみたいなもので、どちらでもいいのですが、もうひとつ異説があります。というのは、この人はスコットランド人(父親はエディンバラ大学の教授)で、もとは Strachan と書いたのだそうです⁴⁾。スコットランドの ch はロッホ・ローモンドのホでおわりのように、ドイツ語の発音ですから、この名前もストラハンと、ハをつよく発音したにちがいません。それが、ロンドンにでてきて、スコットランドのいなか者とおもわれないために c をとったのでしょう。そのばあい、よわい h の音をのこしたかどうかは、わかりませんが、とにかく原発音はストラハンで、それがストラーンやストローンに、かぎりなく近づいていったことは、まちがいません。そうすると 18 世紀については、ストラハンとした方が、事実に近いようにおもわれます。

人名が時代によってちがうように、地名が国によってちがうことがあります。これにはふたつのケースがあって、ひとつは、まったくおなじスペルで、発音がちがうばあい、もうひとつは、ある国の地名を外国でスペルも発音もかえてしまうばあいです。まえの例としてバーミンガム。これは、イギリスの都市の名前としてはそのとおりなのですが、アメリカには、おなじスペルでバーミングハムと h を発音する町があります。ところが、このちがいは、これまであげた三つの発音辞典にはでていないで、研究社の『新英和辞典』にでています。

ここまでは、固有名詞の原発音はなにか、ということでした。バーミンガムもバーミングハムも、それぞれ原発音です。それをしらべるのに、イギリス、アメリカの資料はまえにあげましたし、地名についても、いろいろな地名辞典がでています。ほかの国、たとえばドイツ、フランス、イタリアについては、つぎの発音辞典がおおくの固有名詞をふくんでいます。

Duden Aussprachewörterbuch. 2. Aufl. Mannheim/Wien/Zürich (Duden Verlag) 1974.

L. Warnant, Dictionnaire de la prononciation française. 3me éd. Gembloux (J. Duculot) 1968.

(Noms propres, pp. 419–654.)

B. Migliorini, C. Tagliavini, P. Fiorelli, *Dizionario d'ortografia e di pronunzia*. Nuova ed., Edizioni Rai, 1981. (Rai = Radiotelevisione Italiana, Torino.)

三つとも、外国の固有名詞を原発音で収録していますが、フランスがその点いちばんルースで、どこかの発音という表示がなく、その発音もしばしばフランス読みです。イタリアがいちばんしっかりしていて、たとえばデンマークの童話——ほんとうは子どもの読物ではないのですが——作家の名前で有名な Andersen については、フランスがただアンデルセン、ドイツがアングゼン、デンマーク語でアネルセンとしているのに対して、イタリアは、デンマーク、ノルウェー、ドイツの三つの発音をあげています。おもしろいことに、ドイツ語発音の表示のしかたが、ドイツとイタリアではちがうのですが、ここでは発音の話をしているのではありませんから、省略します。

それよりも、ぼくがまえから疑問におもっているのは、オランダの v の発音で、ぼくがオランダ語をならったときは、ドイツ語の v に近かったのに、発音辞典ではドイツでもイタリアでも英語の v になっています。戦後 30 年で発音が変わる、というようなことがありうるのでしょうか。ベルギー人にきいたら、v を f のように（つまりドイツ流に）発音するのは、オランダなまりだといいました。そうだとするとオランダのオランダ語は方言だということになります。

地名の外国読みの例は、いくらでもあって、日本をジャパンとよぶようなものです。もちろんこういうのはよくしられているからいいのですが、ぼくがトリノのフォンダツィオネ・ルイジ・エイナウディ——これはイタリア共和国の 2 代大統領の蔵書をもとにしてつくられた図書館です——にいたとき、イタリアででた書誌をみていたら、ドイツ語の本で、モナコ出版というのがありました。いくらカジノに各国の人があつまっても、こんな専門的なドイツ語の本がモナコででははずがないとおもって、しらべてみたところ、イタリアではミュンヘンをモナコとよぶのだそうです。地中海岸の大公国もモナコで、ふたつを区別する必要があるときは、モナコ・ディ・パヴィエラとイル・プリンチパト・モナコということになります。

おなじようなことは、オーストリアのヴィーンについてもあって、これはフランスではヴィエヌとよばれますが、フランスにはローヌ川にそってリヨンの南にヴィエヌという町があるんです。パリからヴィーンにいくつもりで、駅でヴィエヌまでといって切符をかったところ、どうも安すぎるのでしらべたらフランスのヴィエヌ行だった、という話をききました。そのことをフランス人にはなしましたら、オーストリアまでいかなくても、フランスのなかでもこまっているのだということです。それは、パリからボルドーにいく途中のポワチエのある県がヴィエヌ県なので、区別する必要があるれば後者をラ・ヴィエヌといわなければならない、ということでした。

このあたりになりますと、問題は図書館に直接に関係してきます。ミュンヘンででた本をモナコの本屋に注文するというのが、おこりうるからです。そんなことは丸善・紀伊国屋がやってくれるとお考えになるかもしれませんが、そうやって他人まかせでかんたんに手にはいる本だけが、図書館にいれるべき本なのではないのです。もしそうならば、図書館員は本の登録と貸出だけをやっていればいいわけです。とことんまでさがすとなれば、出版社、あるいは出版社所属国の本屋にたのまなければなりません。日本でもそうですが、小売店にたのんで、品切れという返事があった本が、出版社にのこっていることがめずらしくはありません。

もうひとつ、地名をアイデンティファイする必要があるのは、ラテン語名にであったときです。Colonia がドイツのケルンだということは、英語・フランス語で Cologne とかくことから、おわかりでしょうが，Coloniae ad Rhenum; Colonia Agrippinae; Colonia al Spre; Colonia Allobrogum;

Colonia Munatiana とならべられたら、区別がつくでしょうか。はじめのふたつがケルン、それからベルリン、ジュネーヴ、バーゼルです。コロニアとはコロニーつまり集団居住地、植民地のことです。それをライン河畔の植民地、シュプレー河畔の植民地というように、区別してよんだのです。

ケンブリジが Cantabrigiae、オクスフォードが Oxoniae なんていうのは、すぐ想像がつきます。しかし、オランダのように、国際関係が複雑だった国では、首府の Den Haag は、オランダのなかでも's-Gravenhage という別名をもち、イギリスでは The Hague、フランスでは La Haye とよばれます。ラテン語だと Hagae Batavorum または Hagae Comitum。フランスのアンシャン・レジームで、出版統制がきびしかったとき、フランス国内で出版できない本は、たいていオランダで出版されました。なかには、ロンドンで出版とタイトルページに書きながら、じつはフランス国内で印刷した、というような例もありますが、ラ・エイ版のフランスの本をみたら、フランスらしい地名にもかかわらず、こういう事情のもとに出版されたものだとご理解下さい⁵⁾。

ラ・エイがでてきたついでに、ヴィエヌのばあいのように、フランスのなかにもラ・エイという場所があることをつけくわえておきましょう。ひとつはラ・エイ・デカルトといって、ポワチエとトゥールのあいだにあり、これはもう名前からおわりのように、デカルトがうまれたラ・エイです。デカルトはオランダと縁がふかいのですが、オランダうまれではありません。もうひとつはラ・エイ・デュ・ピュイ La Haye du-Puits で、シェルブルール港のある半島にあります。もちろん、ヴィエヌのばあいとおなじく、こういう僻地で本がでることはあまりないので、書誌のなかでの混乱は、モナコほどではないでしょう。

地名よりもやっかいなのは、人名です。たとえば、シャーフツベリというイギリスの哲学者がいます。これはシャーフツベリ伯爵で、1代目は政治家、3代目は哲学者、7代目は社会改良家で、みんな Anthony Ashley Cooper というのですが、問題は3人とも同名だから区別しなければならないということよりも、いったいどこまでが姓なのか、ということです。つまり、図書カードにどう書くかということです。この例でいえば、姓がクーパーで、貴族としての称号とでもいうものがシャーフツベリ伯爵、と考えるのがふつうでしょう。アンソニー・アシュリとクリスチャン・ネームがふたつあることは、めずらしくはない。ところが、初代シャーフツベリ伯は、そのまえに初代アシュリ男爵、ロード・アシュリであったのです。じつは、この人、ジョン・クーパーとアン・アシュリの子で、両方の姓をとってアシュリ・クーパーと名のつたようです。しかし、DNBにはクーパーで記載されています。

アシュリでもクーパーでもシャーフツベリでも、まちがいでないということになるのでしょうか。おなじようにして、Kames, Henry Home, Lord という名前もやっかいです。まず Home の読みかたですが、これはホームではなくヒュームです。すこしまえのイギリスの保守党の政治家に、おなじ名前の人がいました。哲学者のヒュームは Hume と書きますが、おなじ家系に属します。このヒュームは、いとこの John Home と、家名のつづりについて論争したあげく、くじびきでどっちかにきめようと提案しました。ジョン・ヒュームのこたえはつぎのようなものでした。「哲学者君、まったくとんでもない提案だよ。というのは、もし君がまければ、君は君自身の名前をとることになり、もしぼくがまければ、ぼくは他人の名前をもらうことになるからだ。」⁶⁾

さて、ケイムズにもどって、この Kames, Henry Home, Lord. という書きかたをみて Henry Home Kames という人が、ロードの称号をもっていた、とおもってもよさそうです。しかし、いま種あかしを半分してしまったようにヒュームが家名なのです。つまり、ヘンリ・ヒュームという人が、ロード・ケイムズという称号を与えられたのです。だから、ヘンリ・ヒュームかロード・ケイムズか、どちらかでなければならないので、はじめにあげた記載のしかたは、たいへん誤解を生みやすいし、まちがいだと

いってもいいでしょう。ぼくは、Kames, Lord; Henry Home. と書けばいいのではないかと、おもっています。

イギリス以外でも、もちろん同様な問題はあるのですが、ドイツでは、家名と称号のくいちがいはあまりなく、フランスの方がはるかにおおいようです。これは、フランスの爵位が売買の対象であったことと、関係があるのかもしれません。イタリア、ポルトガル、スペインについても、著者名のうちのどれが家名であるかについては、慎重な取りあつかいが必要です。ポルトガルのナショナル・ビブリオグラフィーが、ふたつとも姓ではなくクリスチャン・ネームで排列しているのは⁷⁾、姓の確認がめんどうだからではないでしょうか。

フランスではクリスチャン・ネームをたくさんつける風習があるらしく、たとえば Charles-Geneviève-Louis-Auguste-André-Timothée d'Éon de Beaumont というように、六つもつけられた人がいます。こんなにおおいと、ハイフンでつないでおかないと区別がつかないわけで、ここにハイフンをつかうのはフランスだけです。

それで、フランスの例をいくつかあげますと、一番まちがいがおおいのはヴォルテールでしょう。これは称号というわけではなく、ペンネームなのですが、本名は François Marie Arouet で、Arouet が家名です。だから本名を書けば F.-M. Arouet となり、ペンネームなら Voltaire だけでイニシャルなし。F. M. A. Voltaire はまちがいです。同時代のモンテスキューは、モンテスキュー男爵——正確にはラ・ブレードとモンテスキューというふたつの領地をもった男爵ですが、一方だけでよんでもまちがいはない——で、家名はスゴンダ Secondat といいます。Charles-Louis de Secondat という人が baron de La Brède et de Montesquieu なのです。ドルバックのばあいは、日本ではドルバックといいますが baron d'Holbach ですからオルバック男爵で、本名は Paul-Henri Dietrich です。ドイツ人だから Paul Heinrich Dietrich だったわけで Dietrich をフランス流に Thirry とかくこともあります。母がヤコベア・ホルバッハで、母方の伯父がかれをたすけ、かれは伯父の財産と称号を相続してオルバック男爵になったので、その意味では Paul Thirry d'Holbach でも、まちがいはいえませんが、ふつうは本名称号かどっちかを書きます。したがって、あとでおはなしするシオラネスクの書誌が Paul-Henri-Dietrich としているのは、ハイフンがひとつ余計だということになります。

教育論で有名な La Chalotais は、イギリス訳も日本訳も、ラ・シャロテとなっていますが、正確には René-Louis de Caradeuc de la Chalotais で、ビブリオテク・ナシオナルのカタログは、カラドック・ドゥ・ラ・シャロテとなっています。ところが、シオラネスクは、これをラ・シャロテでだしておきながら、Félix-Sixte-Marie de Caradeuc de Keranroy は Caradeuc でだしているのです。後者は 1750 年代はじめの三つの著作がわかっているだけなのですが、ふたりは兄弟なのではないかとおもいます。

おなじような例が、コンディヤックとマブリです。Gabriel Bonnot de Mably (1707–1785) と Étienne Bonnot de Condillac (1714–1780) をならべてかけば、すぐおわかりのように、ボノという共通の名前が家名で、ふたりは兄弟なのです。父はグルノーブルに住んでいた法服貴族 noblesse de robe で、この地位をブルジョアが金で買って官僚機構にはいりこむことは、よくおこなわれていましたから、父か何代かまえのボノ家の主人がブルジョアであったのだと考えていいでしょう。そのボノ家のエティエンヌに、コンディヤックという名前がついたのは、父が近くのコンディヤックという領地を買い、エティエンヌがそれを相続したからで、もとの領地がマブリです。ガブリエルのほかに、リヨンで官吏をしていた長兄も Jean Bonnot de Mably です。このことから逆にラ・シャロテのばあいを推測しますと、カラドック家の兄弟が、ふたつの領地をそれぞれ相続したのだと、考えることができます。

こういう人たちを、図書カードにどう書いたらいいのでしょうか。Bonnot でだすか Condillac でだすか。目録法の本には、たいてい有名な方でだせと書いてありますから、このばあいには Condillac でしょう。しかしどっちが有名かきめかねることもあります。注意しなければならないのは、Condillac としたばあいても、Condillac, É. B. de としてはならないということです。家名をイニシャルでだすことはありえないでしょうから、Condillac, É. Bonnot de となります。こうしておけば、他のカタログでは Bonnot ででていることもありうるという意味ですから、注意ぶかい読者は両方をさがすでしょう。こういう例は、ほかにもたくさんあって、フォルボネは、クレスでは Forbonnais ででていますが、ゴールドスミスでは Veron Duverger de Forbonnais, F. です。Veron de Forbonnais という書きかたもあります。どれかがまちがいだというなら、話はかんたんですが、どれもただしいのでこまるのです。領地名のまえの家名をイニシャルだけでだしているのは、日本ではかなりあるのではないかとおもうのですが、どうでしょうか。全部をフルネームにしておけば安全です。

もうひとつの問題は、おなじ名前のつづりが、国によってちがうということです。むかし、学生時代にプロトニコフという人が書いたイギリス重商主義の研究を翻訳で読んだことがあります。訳者がイギリスのことをまったくしらないで翻訳するという勇敢な人であったために、ジェイムズ1世がヤコブ1世になっていました。こういうのは、前後の関係で想像がつくからいいのですが、Stephan Bauer というドイツ人が、フランス語で書いたり、ドイツ語の著作がフランス語に訳されたりしたばあいに、Stephan がフランス名の Étienne、(ハンガリー語なら Istvan) になってしまうと、図書カードの位置がまるでちがいますから、Bauer, Stephan だけをひいたのでは、検索できないわけです。

ドイツ人の名前の Karl は、イギリスでもラテン系諸国でも、みんな C になります。チャールズ、シャルル、カルロ、カルロスというように。しかしオーストリアの経済学者カール・メンガーは、ドイツ語で書いたのに Carl です。ケネーの弟子でもあったバーデン伯カール・フリードリヒも、Carl ですが、ときどき Karl と書かれています。Socialismus が Sozialismus になるように、ドイツ語化すれば C はきえていくのですが、おなじドイツ語圏でもオーストリアでは C があとまでのこったらしく、メンガーが Carl に固執したのは、かれの反ドイツ感情によるものだともいわれています。

したがって、かれのばあいは特殊な例としておぼえておけばよく、Karl Menger と書かれていたら、ドイツ流の誤記とみなす、ということでもいいのですが、ただこまったことに、かれの息子が Karl Menger なのです。息子は数学者で、経済学の著作はないとおもうので、混同の心配はなさそうですが、境界領域あたりでは発生するかもしれません。『私法公法雑誌』*Zeitschrift für das privat- und öffentliches Recht*, Bd. 14, Wien 1887に掲載された Karl Menger, Zur Kritik der politischen Oekonomie という書評論文は、時期的に息子がうまれるまえですから、Carl Menger のものと推定されます。ヴィーンでさえ、こういう誤記ないし誤植が発生した、ということです⁹⁾。

人名の話はこれでやめますが、さいごにひとつ。外国の人名のかな表記にあたって、よく日本の西洋人名辞典が典拠としてつかわれるのですが、これはそれほど信用できるものではないのです。固有名詞の発音だけでなく、人物のえらびかたも、それについての記述も、日本の西洋人名辞典の水準は、かなりひくいので、もしそれによらなければならないなら、複数の辞典をくらべてみるべきでしょう¹⁰⁾。

人名がないばあい、というのは匿名の著者のことですが、これをどうやってさがし出すかとなると、イギリス、フランス、ドイツ、イタリアで、それぞれの国の匿名著者辞典があり、改訂版やリプリントがでていることは、ごぞんじのとおりです¹¹⁾。そういうものによらなくても、National Union Catalog は、カヴァレッジがおおきいので、かなりつかえます。しかし、数年まえに広島大学で、匿名の著書を匿名のままカタログしているという例にぶつかりました。これだと、ヒュームの『人間本性論』が、ヒュー

ムのカードにはでないことになります。タイトルでさがせばいいじゃないかというのかもしれませんが、子どもの図書館ならそれでいいでしょう。われわれはまず著者でさがします¹²⁾。

匿名著者辞典というのは、ようするに推定——なかにはちゃんとした証拠がある本もありますが——ですから、あとからの研究で定説がかわることもあるわけです。たとえば18世紀のイギリスに、『ジュニアスの手紙』という匿名の政治評論がありまして、この著者がだれかということについて、推理小説なみの研究がつづいています¹³⁾。

もうひとつ例をあげるとホッブズですが、かれの死後にでた *The art of rhetoric, with a discourse of the laws of England*, London 1681 という本があります。このうち、「イングランド法論」は、かれ自身の著作で、初版ですが、「修辞術」の方は、1651年にかれが出版したアリストテレスの『修辞術』の抄訳 *A briefe of the art of rhetorique* と、フェンナーによるタラエウスの『修辞術』の訳の一部分をあわせたもので、後者は、*The art of rhetoric plainly set forth... By Tho. Hobbes...* というタイトル・ページがついています (p. 135) ので、1951年にタラエウスのものであることが発見されるまで、ホッブズのものとされていました¹⁴⁾。これも、研究の発展によって、著者についての推定がかわっていく例です¹⁵⁾。

以上で著者名についての説明はおわって、書誌の説明にはいりますが、これは一般的な序論のあとで、18世紀ヨーロッパを中心におはなししましょう。

- 1) J. M. Keynes, *Essays in biography*, new edition... ed. by Geoffrey Keynes. 1951. 熊谷尚夫・大野忠男訳『人物評伝』岩波現代叢書, 1959年, p. 75.
- 2) G. M. Miller, *BBC pronouncing dictionary of British names*. O. U. P. 1971.
- 3) 大塚高信・寿岳文章・菊野六夫共編『固有名詞英語発音辞典』三省堂 1969年。英語以外の発音は、「外国音を英語流に転写」したというので、つかいものにならない。
- 4) J. A. Cochrane, *Dr. Johnson's printer: the life of William Strahan*. London 1964.
- 5) Cf. R. A. Peddie, *Place names in imprints. An index to the Latin and other forms used on title pages*. London 1932, republished Detroit 1968. ただし Gravenhage (S') は、's-Gravenhage のまちがい。
- 6) E. C. Mossner, *The life of David Hume*, Edinburgh & London 1954, reprinted 1970 by O.U.P., p. 276.
- 7) D. Barbosa Machado, *Bibliotheca lusitana historica, critica, e cronologica*. 4 vols. Lisboa 1741-59. I. F. da Silva, *Diccionario bibliographico portuguez*. 22 vols. Lisboa 1858-1923.
- 8) G. Schönberg, *Handbuch der politischen Oekonomie* の書評。
- 9) 正字法が確立されていなかったのだから、CでもKでもいいのだ、という説がある。しかし、もともと、ドイツ語にはCがなく、ラテン系言語にはKがなかったのだ。
- 10) たとえば、『岩波西洋人名辞典』(1956年, 増補版 1981年) についてみると、オランダのレイデンがライデン、デン・ハーフがハーグ、ゴドウィンの小説の題名「ケイレブ」がカレブとなっているだけではなく、アダム・スミスが1748年に教職についた(冬期の公開講義をおこなったにすぎない)とか、アダム・ファースンがエディンバラ大学でヒュームの後任者となる(ヒュームは大学教授になろうとしたがなれなかった)とかいう記述があり、とくにヒュームについては、ヒュームの項には大学教授になれなかったと書いてあるのだから、内部不統一である。ブリストリが自然科学的業績だけで評価され、アニー・ベサントが「マルサスの人口論を宣伝」したとされる(マルサスの人口論にもとづいて産児制限を宣伝した)のも、見解の相違で片づけられることではないだろう。このベサントの項目からは、女性解放運動への貢献はまったく読みとれない。ストープスもパンクハーストもないという選択規準に対応しているといえよう。ただし、凡例のVIのなかの写音のリストは便利である。
- 11) イギリス— Samuel Halkett and John Laing, *Dictionary of anonymous and pseudonymous English literature*. New and enlarged edition by James Kennedy, W. A. Smith and A. F. Johnson. 7 vols. Edinburgh and London (Oliver and Boyd) 1926-1934, Vol. 8, 1900-1950 by Dennis E. Rhodes and Anna E. C. Simoni,

1956. [1st edition, Halkett and Laing, *A dictionary of the anonymous and pseudonymous literature of Great Britain*. 4 vols. Edinburgh 1882–1888.] 3rd ed., London (Longman) 1980 ff.

ドイツ—Michael Holzmänn und Hanns Bohatta, *Deutsches Anonymen-Lexikon 1501–1850. Aus den Quellen bearbeitet*, 6 Bde. Weimar (Gesellschaft der Bibliophilen) 1902. Bd. 7, 1501–1926, Nachträge und Berichtigungen, Weimar 1928. Reprografischer Nachdruck, 7 Bde., Hildesheim (Georg Olms) 1961. M. Holzmänn und H. Bohatta, *Deutsches Pseudonymen-Lexikon*. Wien und Leipzig (Akademischer Verlag) 1906. Nachdruck, Hildesheim (G. Olms) 1961.

フランス—J. M. Querard, *Les supercheries littéraires dévoilées. Galerie des écrivains français de toute l'Europe qui se sont déguisés sous des anagrammes, des astéronymes, des cryptonymes, des initialismes, des noms littéraires des pseudonymes facétieux ou bizarres, etc.* Seconde édition, considérablement augmentée, publiée par M. Gustave Brunet et Pierre Jannet. Suive 1^e, du dictionnaire des ouvrages anonymes par Ant.-Alex. Barbier, troisième édition, revue et augmentée par M. Olivier Barbier, . . . 2^e, d'une table générale des noms réels des écrivains anonymes et pseudonymes cités dans les deux ouvrages. 7 vols. Paris (Paul Daffins) 1869–79. —これはケラールとバルビエのつぎのふたつの辞典をあわせたもので、さいごの table générale は出版されなかった。*Les supercheries littéraires dévoilées*, par J. -M. Querard, 1. édn. 1847–53, 2. édn. 1865 (Vol. 1のみ), 3. édn. 1869–70 (上記タイトルでは、これが2版となっている)。*Le dictionnaire des ouvrages anonymes* de A. -A. Barbier. 1. édn. 1806–1809, 2. édn. 1822–27, 3. édn. 1872–79 (Louis Manne, *Nouveau dictionnaire des ouvrages anonymes et pseudonymes*. 1. édn. 1834, 3. édn. Lyon 1868. を吸収)。

バルビエだけ独立の版 (Paris, Féchoz) もあり、リプリントも、ケラールは Paris (Maisonnette & Larose) 1964, バルビエは Hildesheim (Olms) 1963. つぎのふたつはケラール, バルビエへの補遺である。

Pierre-Gustave Brunet, *Dictionnaire des ouvrages anonymes, suivi des Supercheries littéraires dévoilées. Supplément de la dernière édn. de ces deux ouvrages*. Paris (Féchoz) 1889. Repr. Paris (Maisonnette & Larose) 1964.

Henry Celani, *Additions et corrections au Dictionnaire des Anonymes de Barbier. Revue des Bibliothèques* 1901, tom. 11.

イタリア—Gaetano Melzi, *Dizionario di opere anonime e pseudonime di scrittori italiani, o come che sia aventi relazione all'Italia*. Milano (Pirole) 1848–59. 3 vols. Repr. New York (B. Franklin) 1960.

O. Giambattista Passano, *Dizionario di opere anonime e pseudonime in supplemento a quello di G. Melzi*. Ancona (Morelli) 1887. Repr. New York (B. Franklin) 1960.

E. Rocco, *Supplemento al Melzi e al Passano*. Napoli (Chiurazzi) 1888.

ジェジュイット教団—Carlos Sommervogel, *Dictionnaires des ouvrages anonymes et pseudonymes publiés par des religieux de la Compagnie de Jésus depuis sa fondation jusqu'à nos jours*. Paris (Société Bibliographique) 1884.

その他の国については, E. P. Sheehy et al., *Guide to references books*. 9th edition, Chicago 1976, AA134–AA177. をみよ。ただし, くわしくはそれぞれの国の参考図書ガイドを参照することが必要である。

著者名をかくすほかに, 虚偽の出版地名, 出版者名をつかうことがある。そういう地名, 人名については P. -G. Brunet, *Imprimeurs imaginaires et libraires supposés. Étude bibliographique, suivie de recherches sur quelques ouvrages imprimés avec des indications fictives des lieux ou avec des dates singulières*. Paris (Tross) 1866. Repr. New York (B. Franklin) 1963.

E. O. Weller, *Die falschen und fingierten Druckorte. Repertorium der seit Erfindung der Buchdruckerkunst unter falscher Firma erschienenen deutschen, lateinischen und französischen Schriften*. 2te verm. u. verb. Aufl. 2 Bde., Leipzig (W. Engelmann) 1864.

M. Parenti, *Dizionario dei luoghi di stampa falsi, inventati o supposti in opere di autori e traduttori italiani, con un'appendice sulla data "Italia," e un saggio sui falsi luoghi italiani usati all'estero, o in Italia, da autori stranieri*. Firenze (Sansoni) 1951.

- 12) どういうことか、女性にかんする書誌は、題名による排列がおおい。たとえば、お茶の水女子大学女性文化資料館編『お茶の水女子大学女性文化資料館文献資料所蔵目録』1・2, 1977, 1979年; 内野久美子編著『日本女性研究基礎文献目録』学陽書房, 1981年。さらに『国立婦人教育会館所蔵図書目録』(第1編, 第2編, 1982年)にいたっては、著者名と書名の並用で、しかも重出をしていないため、事実上は「順序不同」である。単一著者だけが著者として、他はすべて(共著者, 訳者, 編者)書名で、排列されているのかともおもうが、その原則も一貫しているわけではなく、なんの説明もない。『書誌索引展望』Vol. 6, No. 4, 1982, 11の座談会「女性関係書誌をめぐって」には、学生や入門者がつかうためには、内野のやりかたの方がいいという意見がある(p. 37)。研究がその段階にあることを意味するのかもしれない。
- 13) F. Cordasco, *A Junius bibliography with a preliminary essay on the political background, text and identity*. New York (Burt Franklin) 1949. Cf. J. M. Maclean, *Reward is secondary. The life of a political adventurer and an inquiry into the mysteries of 'Junius.'* London (Hodder and Stoughton) 1963.
- 14) W. S. Howell, *Logic and rhetoric in England, 1500-1700*. Princeton U.P. 1956, reissued by Russell & Russell, New York 1961, pp. 279, 384-5. なお、トラエウスの著作とされる部分の例文のなかにビュアリタンが登場しているので、忠実な翻訳であるかどうかは、疑問であるが、そのことはホップズの著作であるという証拠にはならない。
- 15) イギリス思想史のなかから、この種の例を追加しておこう。
 1. *The discourse of the commonweal* という本が、1581年に、W. S. という匿名で出版され、今世紀初めに、ラモンドによって、著者はジョン・ヒューズであることが主張された。これがほぼ定説化したのだが、アンウィンの疑問にもとづくヒューズの研究によって、ふたたびトマス・スミス説が有力になった。Edward Hughes, The authorship of the "The discourse of the commonweal." *Bulletin of the John Rylands Library*. Vol. 21, No. 1, April 1937. 邦訳(出口勇蔵監修『近世ヒューマンイズムの経済思想』有斐閣, 昭和32年) pp. 172-194. は、いずれとも決定しがたいという。
 2. アダム・スミスが1753年6月13日から1757年6月13日までの間に、セネカ論をかいたと、ヒッグズが、『経済学書誌』で主張し、天野敬太郎の『古典学派書誌』もこれを承認しているが、ヴィクトリア(オーストラリア)公共図書館が1923年に購入していたことがわかり、それを調べた結果、スミスのものではないと確認された。J. A. La Nauze, A manuscript attributed to Adam Smith. *Economic Journal*, 1945.
 3. *An historical essay on the English constitution*. London 1771 という匿名出版物は、D.N. およびかなり多くの図書館(たとえばスコットランド・ナショナル・ライブラリ)のカタログでは、アラン・ラムジーの著作とされている。しかし、バタフィールドその他による疑義が、今日では承認されるにいたった。H. Butterfield, *George III, Lord North and the people 1779-1780*. London 1949, p. 349. A. Smart, *The life and art of Allan Ramsay*. London 1952, p. 141.

III

書誌の書誌と人名辞典について、かんたんにおはなしします。

書誌の書誌というと、2種類のものが考えられます。ひとつは文字どおりの書誌の書誌で、ベスタマンなどの本ですが、もうひとつは参考図書ガイド・ブックです。後者つまり Reference Guidebook はしばしば、書誌をあげるべきところで、入門書や概説書をあげているので、そのかぎりではつかいものになりません。つぎにあげるガイド・ブックは、すべてそういう傾向がありますが、経済学の主要文献として『国富論』から『一般理論』までの数冊があげられているのをみるために、こういう本を読む経済学の研究者はいないのです。

G. A. Burrington, *How to find out about the social sciences*. Oxford, New York, etc. (Pergamon) 1975.

T. Freides, *Literature and bibliography of the social sciences*. Los Angeles (Melville) 1973.

P. R. Lewis, *The literature of the social sciences*. London (The Library Association) 1960.

N. Roberts (ed.), *Use of social sciences literature*. London-Boston (Butterworths) 1977.

この問題はおそらく、専門家が、一方で自分の専門領域をほりさげていながら、他方で視野を他の領域にひろげていくばあいの、バランスのとりかたに関係するとおもいますが、視野をひろげるばあいも、まったくのしろうととして初歩からはいることはないでしょうから、入門書や概説書のリストで満足する人はいないとおもいます。

ウィンチェルをもとにしたシーハイの *Guide to reference books* になりますと、そういうむだはすくなくなっていますが、それでもしばしば、書誌または書誌の書誌のかわりに、入門書や通史をあげて、それらが書誌としてどうつかえるかに、まったくふれていません。辞典をあげるのは、その項目のそれぞれに参考文献がでているならば、意味があるのですが、たとえば鹿島の『社会科学大事典』は、いっさいそういうものを省略しているので（ほかにもおなじような辞典はあります）、このばあいには意味がないのです。

つぎの三つのうち、ドイツの方はまだいいのですが、フランスはふたつとも、いまいったようなむだがおおすぎます。二番目の本の経済学の項をみますと、34 ページのうちで、書誌や辞典があげられているのは5 ページ半にすぎません。こういう本で、サミュエルソンやマルクスの主著をおしえてもらっても、しかたがないのです。

W. Totok, R. Weitzel, K. H. Weimann, *Handbuch der bibliographischen Nachschlagwerke*. 1953; Dritte erweiterte, völlig neu bearbeitete Auflage. Frankfurt a.M. (Klosterman) 1966.

L. -N. Malclès, *Les sources du travail bibliographique*. 3 tomes 1950–58, réimpression Genève (Droz) 1965.

Louise-Noëlle Malclès, *Manuel de bibliographie*. Paris (PUF) 1963.

書誌の書誌となれば、さすがによけいなものははいっていません。いちばん有名なのはベスタマンの『書誌の世界書誌』¹⁾ですが、これの初版は、あきれたことに自費出版なんですね。第2次大戦争中の1939～40年に、2巻1250 ページという書誌の書誌を、自費出版するまえに、かれはブリティッシュ・ミュージアム所蔵の書誌10万ないし8万冊を、全部自分で点検したのだそうです。その直接の結果が、『ブリティッシュ・ミュージアム季報』（1936年）にでた「購入希望図書1」と、『図書館協会記録』（1936年6月）にでた「あたらしい書誌の書誌への序論」です²⁾。こうしてできあがった『書誌の世界書誌』は、one man bibliography のさいごだろうといわれましたが、かれは死ぬまでに3回増補しています。ベスタマンという人は、生いたち、財力など、謎がおおいので、それをせんさくするのもおもしろいのですが、いまの主題とはあまり関係がないので省略して、この書誌の書誌の限界にふれて先にすすみます。まえに、すべての書誌は、できあがったときにすでに古くなるといいましたし、書誌の規模がおおきくなればなるほど、その傾向はつよくなるといいました。それがまさにベスタマンの書誌にあてはまります。そのことが限界の第一で、第二は、かれが単行本としての書誌に、収録を限定したということです。そうすると、第二の限界によって第一の限界が増幅されるわけです。単行本としての書誌がでるまでに、時間が経過し、それをベスタマンが収録して本にするまでに、また時間が経過するんですから、あたらしいものがおちる条件がふたつかさなっていることになります。

それで、雑誌にでたものと、それをふくめてあたらしい書誌についての、情報がほしいわけですが、そのためには、たとえば、

T. H. Howard-Hill, *Bibliography of British literary bibliographies*. Oxford 1969.

のようなものがあって、もちろん題名にあるようにイギリスだけですが、題名のリテラリは、日本の通

念としての文学ではありません。ホップズの項には、ぼくの『近代人の形成』の附録の書誌がでています。ただし、この本は *Index to British literary bibliography* という6巻本の第1巻で、さいきん第6巻がでたようですが、ぼくは第1巻しかみていないので、全体についてはなんともいえません。第1巻だけでいいと、ありがたいのは、ロンドン大学の図書館学科の卒業論文としてつくられた書誌が収録されていることで、これは公刊はされていませんが、ロンドン大学にはあるわけですから、おそらくコピーをつくってもらうこともできるでしょう。

雑誌にでた書誌についての速報がほしいのですが、これはどういう雑誌があるのか知りません。そこまですがなくても間にあう、ということでもあります。

時間がないので、人名辞典については、どんな人名辞典でも編集者の(あるいは時代により国による)バイアスがある、ということだけ申しあげておきましょう。たとえば、*Dictionary of national biography* は、レズリ・ステイーヴンのようなすぐれた伝記作家たちがつくったのですが、書誌的にしばしば不正確であること(とくに著作の題名)をべつにしても、ヴィクトリア期イギリス特有の偏見から自由ではありません。リカードゥ派社会主義者は、チャールズ・ホールをのぞいて、だれもでていないのです。どこの国の人名辞典でも、そういう傾向はさけられないようで、だからイギリスやフランスでは、労働運動・社会運動、つまり反体制側の人名辞典が、べつにでるようになりました³⁾。

つぎのような例もあります。James Burgh について、DNB は、この人は私塾をひらいて金をもうけ、本を書いたというだけで、たしかに改革者とかアメリカ独立支持とかいうことばはありますが、内容はなにもわからないのです。もちろん、人名辞典だけ読んで思想の全貌をしろうというのは、虫がよすぎるにしても、これではやはりおそまつすぎるといえるでしょう。

バイアスが、いわゆる偉人伝的バイアスであることと、関係があるとおもうのですが、おおくの人名辞典では、著作者および著作に中心的位置をあたえていないので、人名辞典を書誌として利用しようとすると、期待はずれになることがおおいようです。DNB はまだいいほうでしょう。ドイツでは、あとでおはなしするような事情で、18世紀については、ナショナル・ビブリオグラフィーがあるとおもっていただければいいのですが、そのばあいには、人名辞典があるていどは代用品になるかということ、*Allgemeine deutsche Biographie*. 56 Bde., Leipzig (Duncker) 1875-1912 も、*Neue deutsche Biographie*. Berlin (Duncker und Humblot) 1953- も、くわしくしらべたわけではありませんが、どうも偉人伝的であるようにおもわれ、『学識ドイツ——現存ドイツ著作家辞典』*Das gelehrte Teutschland oder Lexikon der jetztlebenden deutschen Schriftsteller*. Anfangen von Georg Christoph Hamberger, ... fortgesetzt von Johann Georg Meusel の方が、利用効率はいいようです。

この辞典は、副題にハンベルガーがはじめてモイゼルが継承したと書いてありますが、そのもうひとつまえばイエッヒャーの『一般学者辞典』(1750~1897)です。ハンベルガーの初版がでたのは1767年で、2版が1772年、1773年にかれが死んだあと、モイゼルが1776年に3版をだしました。さいごには、もとの題名のままの5版(23 Bde. in 24, Lemgo 1796-1834)と、J. G. Meusel, *Lexikon der vom Jahre 1750-1800 verstorbenen deutschen Schriftsteller*. 15 Bde., Leipzig 1802-16. 前者は生存者辞典ですから、ときがたつにつれて死者が除去されるわけで、それをあつめたのが後者ということでしょう。どちらもシーハイにはでていませんが、トートクにはでていて、ともにたかく評価されています⁴⁾。トートクは、両者が、ハインジウスやカイザーにでていない、ちいさな著作まで収録している、と書いていますが、このことは逆に、あとでのべるような、ハインジウス、カイザーの信頼性の問題につながります。

ぼくはぐうぜんに、この本の3版をオランダの古本屋からかっただけで、まだ最終版をつかったこと

はありません。3版を読んでみますと、たしかに書誌はかなりくわしいようで、ハインジウス、カイザーのような省略がありません。ただし、1776年の時点での評価によっていますから、カントなどは生年不明のままで半ページなのに、J.J. モーザーというデンマークの高級官僚が12.5ページをしめているという状態です。これはむしろ、まだ『美と崇高の感情』や『視霊者の夢』程度の段階であったカントを、みのがさなかったという点で評価しなければならないでしょう。モーゼス・メンデルスゾーンを、モーゼスで排列しているのには、なにか理由があるのでしょうか。われわれはふつう、メンデルスゾーン・バルトルディをバルトルディでださないように注意するのですが、モーゼスはあきらかに家名ではありません。

ハンガリーには *Das geistige Ungarn* という人名辞典があります⁵⁾。ドイツ語で、ヴィーンとライプツィヒで出版されたもので、ハンガリー語をしらないものには、たいへんありがたいのですが、さらにありがたいことに、著作のタイトルは、ハンガリー語でだして、ドイツ語訳をつけています。この辞典のおかげでたすかった例をひとつあげましょう。フランス革命のときにヴィーンのジャコバン・クラブに属していたマルティノヴィチというハンガリー人があります。反乱計画が暴露して、ブダペスト郊外で公開処刑をうけるのですが、かれの著作に『人間および市民の教理問答』という人権宣言の解説のようなものがあります。ぼくの記憶にまちがいがなければ（ここにくるまえに確認するひまがなかったので）、セリグマンの社会科学辞典には、この本がフランス語ででているのです。ハンガリー人がヴィーンで本を出すことは、オーストリア・ハンガリー帝国の存在を考えれば、なにもふしぎではないのですが、フランス語での出版ということになると、よほどフランス革命に熱狂していたのかもしれないけれども、ポーランドやドイツほどにも普及力はなかったはずなので、現実的ではない。そういう疑問があったところに、この *Das geistige Ungarn* が手にはいったので、しらべてみました。ハンガリー語でタイトルが書いてあるので、その点にかんするかぎり疑問は解決しました。ところが、この辞典には、出版地が一切省略されているのです。セリグマン(?)はヴィーンとしているし、主要な活動の場所がヴィーンであったことはあきらかなので、ヴィーン出版と推定してまず大丈夫だとはおもうのですが、処刑がブダペストだというのが、気にかかります。結局、一步前進しただけだとはいえ、このあたりの問題になると、研究における収穫通減の法則が働きますから、そのかくごをきめれば、この一步でもありがたいのです。

ここまでくともう、18世紀の実例をいくつかあげていますので、それをもっとひろげて、18世紀の書誌について申しあげましょう。

- 1) Theodore Besterman, *A world bibliography of bibliographies and of bibliographical catalogues, calendars, abstracts, digests, indexes, and the like*. 1st edn., 2 vols., London 1939–1940; 2nd edn., 3 vols., London 1947–49; 3rd edn., 4 vols., Genève 1955–1956; 4th edn., 5 vols., Genève (Societas Bibliographica) 1965–1966. 書誌をふくめたベストマンの著作目録は、F. Francis, Theodore Besterman, writer and editor: a bibliographical appreciation, in *The Age of the Enlightenment, Studies presented to Theodore Besterman*. Edinburgh and London (Oliver and Boyd) 1967. 書誌を中心としたかれの半ば自伝的な講演として、T. Besterman, *Fifty years a bookman*. The Arundell Esdaile Lecture 1973, London (The English Association, The Library Association) 1974.
かんたんな紹介として、水田洋「ベスターマンのこと」図書館雑誌, 1980. 11. 同「シオドア・ベストマン (1904–1976)」書誌索引展望, 1982. 8.
- 2) T. Besterman, *Libri desiderati*. I. First short-title list of bibliographies not in the British Museum Library, *The British Museum Quarterly*, Vol. X, 1936. T. Besterman, Introduction to a new bibliography of bibliographies, *Library Association Record*, June 1936.
- 3) J. M. Bellamy and J. Saville (ed.), *Dictionary of labour biography*. 4 vols. London (Macmillan) and Clifton

- (A. M. Kelley) 1972-77. J. Marlron (ed.), *Dictionnaire biographique du mouvement ouvrier français*. 15 tomes, Paris (Les Éditions Ouvrières) 1966-77. Institut für Marxismus-Lenismus, *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung: Biographisches Lexikon*. Berlin (Dietz) 1970. シーハイのガイドには、ベラミはあるが、マルロンは (ML 研究所ももちろん) でていない。国別偏差の例として指摘しておく。
- 4) W. Totok et. al., *a. a. O.* S.145. これもまた、前注でふれた国別偏差の例である。なお、ハンベルガー、モイゼルともに、Georg Olms によってリプリントされている。
- 5) Oskar von Krücken u. Imre Parlagi (hrsg.), *Das geistige Ungarn. Biographisches Lexikon*. 2 Bde. Wien u. Leipzig. o. J. [1981]. Sheehy, AJ187.

IV

18 世紀の書誌として、いちばん有名で、完全だとされていたのは、まえにあげたハインジウスとカイザーです。

Wilhelm Heinsius, *Allgemeines Bücher-Lexikon oder Vollständiges alphabetisches Verzeichnis aller von 1700-1892 erschienenen Bücher*. 19 vols., Leipzig (Brockhaus) 1812-94. Repr. Graz 1962.

Christian Gottlob Kayser, *Vollständiges Bücherlexikon, enthaltend alle... in Deutschland und angrenzenden Ländern gedruckten Bücher*. 36 vols. Leipzig 1834-1911. Repr. Graz 1962.

ごらんのとおり、一般とか完全とかいうことばがタイトルのなかにありますが、けっして一般でも完全でもないことが、さいきんになってわかりました。それまでは、18 世紀の出版物の総目録があるのはドイツだけということで、各国啓蒙思想研究者の羨望の的だったのですが、まず、コーピツが、ふたつの書誌のカヴァリジがきわめてひどいことを、つぎにファビアンが、収録データにまちがいがあることを指摘しました²⁾。かれらによれば、全ドイツ図書生産に対して、ハインジウスのカヴァリジは約 20%、カイザーのそれはせいぜい約 3 分の 1 であり、しかも情報源として出版社の広告 (じっさいの出版物ではなく) などがつかわれたために、広告から出版までの変化 (出版社の変更、出版の中止) が、無視されているということです。

こうなると、これまでにハインジウスとカイザーを基礎にしてやってきた書誌は、すべて土台がくずれるわけです。一方では、出版された本が収録されず、他方では、出版されなかった本が収録されてしまった、ということになるからです。たとえば、絶版のため入手できないのですが、プライス夫妻の『18 世紀ドイツにおけるイギリス文学の出版』と『18 世紀ドイツにおけるイギリス人文学の出版』は³⁾、当時の書評やいくつかの図書館蔵書目録によった部分はいいとしても (これも現物にあたっていないことからくる問題をふくみます)、ハインジウスとカイザーによった部分は、全面的な再検討を必要とするでしょう。ハインジウス、カイザーには、もうひとつこまることがあります。それはタイトルが省略されていることで、とくにドイツ語の前置詞の格支配が時代により地方によりちがったようなばあい、われわれとしてはお手あげなんです。

フンバートの『ドイツ官房学書誌』⁴⁾は、かなりハインジウスとカイザーによっていますが、さいわいなことに、ドイツ、オーストリアのおおくの図書館で原本を確認しているので、その部分だけは信頼できるわけです。18 世紀社会科学年表のドイツ文献については、これがもっとも有力な資料です。

官房学ということばは、ふつうはドイツの重商主義、しかも王室財政的見地のつよいものをさすのでして、フンバートの目次にも「狭義の官房学すなわち財政学」という項目があるほどです。ところがこのフンバートの書誌は、当面の目的にとってさいわいなことに、このことばをおそろしく広く解してしまして、時代的にもマルティン・ルターからモーゼス・ヘスあたりまでふくめています。たての幅だけでなく、よこの幅も、いまあげたふたりの名前から、推測できるでしょう。「広義の警察科学すなわち国

家学」は、教会問題やユダヤ人問題をふくみますし、政治史、法学という項目もべつにあります。外国からの影響についての配慮もあって「ドイツにおける重農主義論争」「ドイツにおけるスミス主義」「ドイツ官房学に引用された外国語文献」の項目がそれです。

しかし、ここまで縦と横にひろげてしまうと、これを『官房学書誌』とよんでいいものかという疑問が、とうぜんおこってきます。マルティン・ルターはまだいいとしても、ヘスの『ヨーロッパ三頭政治』⁵⁾にぶつかったときは、マルクスもはいつているのではないかとおもったほどです。さすがにそれほどではありませんでしたが、マルクスの故郷トリーアの市役所の役人であったフーリエ派のルードヴィヒ・ガルがはいつていました。

カント、フィヒテ、ヘーゲルも、もちろん全著作ではありませんが、収録されていますし、シュライエルマッハー、ミュラー、ゲルレス、ゲンツ、ハラーなどのロマン派ないし反動派もあります。フリードリヒ・リストはいうまでもありません。それではなにが不足しているのかというと、文学・哲学などがない（技術は農・工・鉱業のなかにはいつています）のはあたりまえだとしても、たとえば、アメリカ革命、フランス革命へのドイツ思想の対応、さらにはそれをふくめた民主主義思想の展開というようなことになると、この書誌ではさがせないのではないかとおもいます。

もうひとつの問題は、フンパートが、おそらくハインジウス、カイザーから採録したものの、所在を確認できなかったタイトルを、どうするかということです。それは全部出版されなかったものとして、処理できればかんたんですが、そうとはかぎりません。たとえば、クリスチャン・ガルヴェの『道徳と政治の結合についての論文』というのがフンパートの7585にあります⁶⁾。しかし所在がしめされていないから存在しなかったと考えていいわけではなく、ローベルト・モールの『国家諸科学の歴史と文献』に、この版があげられています⁷⁾。モールは内容に言及しているので、じっさいに読んだと考えても、はばまちがいはないでしょう。

そのつぎの7586の、ドルバックの『市民社会の体系』⁸⁾は、フランス語の『社会的体系』⁹⁾の翻訳で、「社会」ということばがドイツ語では「市民社会」としか訳せなかったことの、証拠のひとつですが、これもフンパートは所在をしめしていません。しかし、フルクライセ——あるいはヴェルクリュイス——の『ドルバック書誌』¹⁰⁾には、マールブルク国立図書館 F8112 として、収録されています。ついでにいつておきますと、このマールブルク国立図書館には、ぼくの記憶では、ベルリンのプロイセン国立図書館の蔵書の戦時中の疎開部分をひきうけたまま、東西ドイツの分裂によって返還されないものがあるはずですが、このドルバックもそうかもしれません。

ではつぎに、まえにあげたようなフンパートの穴をうずめるには、どうすればいいかといひますと、いちばん役にたったのは、『ドイツ文学初版辞典』¹¹⁾です。これは、収録人数約 1360、点数約 47000 ということで、文学 *Dichtung* または *Literatur* ということばは、日本よりずっとひろい意味でつかわれています。もちろん、いくらひろいといひても、カント、フィヒテ、ヘーゲルははいつていません。ライプニッツ、ヴォルフも同様です。しかし、ヘルダーやメンデルスゾーンははいつています。もっとも、いまあげた大物は、べつにしらべようがありますから、ぬけていてもいいので、こまるのは、ガルヴェ、ゲンツのような二流三流です。おなじく翻訳業者でありながら、コーゼガルテンはとって、ガルヴェはおとすとか、反革命ジャーナリストのなかでゲルレスをとってゲンツをおとすとか、この選択はみごとですが、利用者にとっては、ここで網をちょっとひろげてくれるかどうかということが、おおきながいを生むのです。

ドイツにおけるアメリカ革命、フランス革命については、あとで、ほかの国のばあいといっしょにしっておはなしすることにして、ここでもうひとつつけくわえておきたいのは、フーゴー・ボルストという

シュトゥットガルトの商人の蔵書目録で、『おおきな世界とちいさな世界をうごかした書物たち——1749—1899年の初版の刊年順排列による世界文化史のこころみ』¹²⁾です。これは、ドイツだけでも18世紀だけでもありませんが(ゲーテがうまれてからの150年間)、中心がドイツにおかれていることは、まちがいありません。この人は父親ゆずりの収集癖があって、少年時代には郵便切手やヴァインのレーベルをあつめ、長じては20世紀初頭(1900~1933)の絵画約400点をあつめたのち、本の収集に転じたということです。かれが1967年に死んだときには、いまいった目録はほぼ完成していたそうで、それは1969年に出版されました。

索引をいれて1005ページのカatalogには、4393点が収録され、なかには『共産党宣言』のカウツキー版が1848年のところにでているというような、おかしなこともあります。全体としてひじょうに役にたちました。

逆に、つかうべきであったのにつかわなかったのが、『ドイツ文学史ハンドブック、書誌編第6巻啓蒙時代』¹³⁾です。これは、わずか76ページで、代表的思想家131人について、どんな書誌、全集、研究があるかを、研究の現状を中心に紹介したもので、直接にはいま年表をつくらうというときの役にはたたないのですが、そこからさかのぼって、そこにでている書誌をしらべる(日本でどのくらい利用できるかは疑問ですが)ことぐらいは、やるべきだったとおもっています。そういう書誌のなかで、『ヘルダー書誌』¹⁴⁾だけは、ちょうど手もとにあったので、初版辞典と対照して確認するのに利用しました。その過程でわかったのは、著者・编者・訳者の関係を確認するには、この種の書誌だけでは困難だということです。これはヘルダーにかぎったことではなく、レッシングとライマスのあいだで、あるいはあとでのべるシオラネスクのなかの諸項目で、わからない点がいくつかありました。まえに匿名著者の推定については、それぞれ専門の研究を考慮しなければならないといいましたが、一般に、書誌だけでおっていく仕事には、そういう限界がありますから、断定できることとできないことを、みわける必要があります。

ドイツはこのくらいにして、つぎにイギリスについておはなししましょう。

イギリスではさいきん、18世紀の出版物のカatalogが、ショート・タイトルで出版されました。主題別カatalogの方がはやいのですが、収録範囲はブリティッシュ・ライブラリ所蔵本にかぎられ¹⁵⁾、著者別カatalogは、おくてでたかわりに、オクスフォード(ボドリアン図書館)とケンブリジ(大学図書館)とを収録することができました¹⁶⁾。

ブリティッシュ・ライブラリは、もちろんイギリスの本については、最大規模の単一コレクションですが、それでもいろいろ欠落があって、たとえば議会議改革者カートライトの著作などは、さびしいものです。だから、オクスブリッジの蔵書で補強したことは、よかったとおもいます。しかし、このカatalogは、まえにいったようにショート・タイトルですから、つねにもとのカatalogを参照しなければならず、しかもオクスブリッジのカatalogは公刊されていませんから、お手あげです。もちろん、たいいていのばあいは、ナショナル・ユニオン・カatalogでわかるとおもいますが。

主題別目録のほうはもっとひどくて、デューイの十進分類とは、こんなに奇妙なものかとおもったほどです。たいいていの時事評論は一般史のなかの各国のところでさがさなければならず、宗教の項目には、「創造」や「地獄」はあっても、思想上重要な「寛容」はないのです。

このカatalogをどうつかうかについて、ことし(1982年)の夏にロンドンでセミナーがあったのですが、とにかく、社会科学年表にとっては、ほかの資料からとられたデータを確認することにしか、つかえませんでした。

あとからでた著者別カatalogのほうは、収録の範囲もひろがっていてまだましですが、ショート・タ

イトルの不便さはわかりがありません。

分類がつかいにくいといったついでに、あとでおはなしするつもりだった、分類書誌のつかいにくさに、ここでふれておきましょう。たとえば、天野敬太郎の *Bibliography of the Classical Economics*¹⁷⁾ のアダム・スミスのところに、*theoretical* と *systematic* という分類があります。これが何を意味するのかわからない。対象による区分なのか、方法（研究方法）による区分なのかということもわからないし、そのどちらにしても境界線をどうひくのかわからない。おもしろいことに、体系ということばをふくむタイトルが、いくつか *theoretical* の分類にいられています。

もうひとつの例をあげると『ジョゼフ・プリーストリ書誌』¹⁸⁾があります。これも、*Theological and religious; Political and social; Educational and psychological; Philosophical and metaphysical; Historical; Scientific* というように分類しているのですが、内容をみると、*An history of the corruptions of Christianity* は神学に、*A general history of the Christian Church* は歴史に、*Considerations on church authority* は政治に、分類されています。この時代、とくにプリーストリのような人のばあいには、こういう部門が未分化であったことに特徴があるのに、無理に、したがって恣意的にわけてしまったというわけで、利用者としては、巻末のショート・タイトル・インデクスがなければ、まったくお手あげです。

もちろん、年代順にならべても、インデクスなしにさがすのはたいへんなのですが、それでも、恣意的な分類よりも、ならび方に根拠があり、前後関係がわかることは、ありがたいのです。ベントリ、パークリ、パーク、コベット、ディフォー、ジョンソン、ハワード、ヒューム、ペイン、ポーブ、スウィフト、トランド、ウォルポールなどの書誌をみますと¹⁹⁾、たいてい年代順です。主著とマイナーなものとのをわけるとか、初版を年代順にならべて、それぞれの初版の項にあとの版をまた年代順にならべるとか、こまかい点はいろいろですが。ひとつ奇妙なやりかたをあげますと、ドルバック書誌²⁰⁾は、年代順にならべた各項目に、参照年代がついていて、その本があとでいつ出たかがわかるようになっているのはいいのですが、まえにさかのぼることができないのです。つまり、初版の項から、あとの版をさがすことはできても、あとの版から初版をふくめてまえの版をさがすことができないのです。こういうのをみると、ビブリオグラファーが、もちろん利用者のためを考えて、いろいろ工夫しているのに、結果としてはつかいにくくなっているというのは、なぜなのだろうかという疑問が、きえないのです。

ついでにもうひとつ。ビブリオグラファーのわるい癖というか、執念というか、書誌情報を選択してすてるよりも、なんでも集積しようというやりかたについて、おもいだしたことを申し上げます。ヒッグズの『経済学書誌 1751—1775 年』²¹⁾というのは、かぎられた時代についてであります。この時期が重要であり、書誌の内容がくわしいので、いまでも価値を失ってはいないとおもうのですが、これについてピエロ・スラッファが——この人はケインズの高弟であり、グラムシの親友であり、ぼくの『アダム・スミスの蔵書』の助言者でした——つぎのようにいっていました。「ヒッグズは、書誌情報を十分にしらべないで全部とりいれてしまったので、たとえば、ぼくが古本屋のカatalogでみて、しらせただけなのに、その本をスラッファ氏の所有として記載することになってしまった。そういう調子なので、この書誌は不正確で、信頼できない。」情報が未確認で信用できなくても、すてるよりもいれておこうというのが、ビブリオグラファーがいつも出あう誘惑でありまして、この誘惑は、日本のように、現物をみないで書誌をつくるというはなれわざをやらなければならないばあいには、とくにつよく、また、それだけにとくに危険なのです。

天野さんの『古典経済学書誌』には、アダム・スミスの著作として、「セネカの手紙についての思索」と『グレート・ブリテンおよびアイアランドについてのおぼえがき』というのがはいっています²²⁾。前

者はいまあげたヒッグズによったものとおもわれます²³⁾、後者は、ハーヴァードのクレス文庫のなかにあるヴァンダブルー・コレクションのカタログからとったものとおもわれます²⁴⁾。ところが、ヒッグズの主張は、実物にもとづいて、ラ・ノーズによって否定されました²⁵⁾、ヴァンダブルー・カタログの記載は、主著以外の部分ではこれだけに実物がないというしがついていて、しかも典拠が示されていないのです。おそらく、現代のスミス研究者で、以上のふたつがスミスの著作だと考えている人はいないでしょう。

ぼくは天野ビブリオグラフィーが、日本学術会議の **Economic Series** として出版されたとき、学術会議第3部の幹事として出版を担当していましたので、以上のようなことを天野さんに説明して、削除したほうがいいのではないかといたったのですが、日本のスミス研究者よりも外国の書誌のほうが信頼できるらしく、ききいれられませんでした。それほど、ビブリオグラファーにとって、書誌情報の誘惑はつよいのだ、ということです。こういうばあい、誘惑に抵抗しきれなかったら、未確認あるいは疑問のしるしぐらいはつけておくべきでしょう。

書誌のつかいにくさについての脱線は、これでおしまいにして、本論にもどります。

いまここでのおはなしの、出発点になっている18世紀の年表は、西ヨーロッパ諸国のなかでスコットランドが、イングランド、アイルランド、北アメリカからはなれて、別枠になっています。それは、アダム・スミスを中心とするスコットランド啓蒙思想の研究を考慮したからで、もともとこの年表が、スコットランド啓蒙についてのぼくの蔵書目録の附録という形態で出版されたということに関係があります。それで、スコットランドだけを抽出するのに、どういう資料をつかったかが、問題になります。ジュサップの『ヒューム書誌』は、スコットランド哲学という副題をもっていますが、もちろんそれだけではたりません。イギリス全体の書誌のなかから、スコットランド人をひきぬくことは、名前に特徴があるので、ある程度はできますが、あまり正確にはできません。結局はDNBで確認することになるにしても、その前段階としてつかったのが、スコットランドの図書館のカタログです。

さいわいなことに、スコットランドの大きな図書館の大部分は、目録を出版しています²⁶⁾。エディンバラ大学、グラスゴウ大学、セント・アンドルーズ大学の図書館と、のちにナショナル・ライブラリ・オブ・スコットランドとなるアドヴォケイツとライターズ・トゥ・シグニットで、あとのふたつは、いずれも弁護士協会図書館なのですが、弁護士のなかでも資格のちがいによって、組織がちがったようです。ヒュームが司書をしていたのは、前者です。さらに、ちいさなものですがエディンバラ哲学協会蔵書目録というもの、でています。

以上のうち、エディンバラ大学の目録がいちばんあたらしくて20世紀のはじめの出版であるほかは、18世紀末から19世紀なかばにかけての出版ですが、18世紀スコットランドの出版物については、かなり役にたつと考えたわけです。いちばん古いグラスゴウ大学の目録はマイクロフィルムで入手し、セント・アンドルーズ大学のものは、館長の好意によって、さいごの1冊を、未製本のまま売ってもらいました。

では、こういう目録がどのくらい役にたったかといえますと、まず、スコットランド人の著者を抽出するしごと——これは4大学の目録によって、広島大学の舟橋君にやっていただきましたが——この作業には役にたちました。BLのカタログより、はるかにちいさいので楽なのです。しかし、スコットランドの図書館が、意識的にスコットランド人のものをあつめるようになったのは、比較的あたらしいことで、スコットランドの図書館だからスコットランド啓蒙思想関係がよくあつめられているというわけにはいきません。ものによっては、BLあるいはNUCでたしかめたり補足したり、しなければなりませんでした。とくにこまったのは、ふるい目録の書誌的事項（とくに題名）が、しばしば不正確だということ

とです。たとえば、さいしょの冠詞を、はぶいたりはおかなかつたり、まちまちだというように。

イギリス全体の思想史の書誌としては、『ケンブリジ・イギリス文学書誌』とその新版があります²⁷⁾。これについては、literature の概念が、日本の英文学者の常識をはるかにこえて、ひろいということをし、くりかえして強調しておかなければなりません。そうでなければ、いまの目的には役にたたないでしょう。哲学や旅行記はいうまでもなく、法学や自然科学の項目もあります。もちろん、広義の literature という文字どおりにすべての文献が収録されているわけではありませんから、周辺部に欠落があるのはしかたがないことですが、そのこととならんで注意すべきことは、新版がかならずしも旧版よりいいわけではなく、したがって、新版があるから旧版はいらない、というわけではない、ということです。

周辺が欠落している例をあげれば、議会改革運動のジョン・カートライトです。旧版には、*Life and correspondence of Major Cartwright. 2 vols., 1926* がでているだけ (Vol. 2, p. 145) で著作がなく、新版にはなにもありません。しかも、この 1926 は 1826 のまちがいです。ふたつの版の比較は、この例でもおわかりだとおもいますが、さらにいくつかの例をあげておきましょう。スターンの小説『トリスラム・シャンディ』の初版は、新版ではわからなくなっていますし、キャスリン・マコーリについては、旧版には、著作権、教育、フランス革命、イギリス史についての著作がでているのに、新版では、さいごのものだけになっています。ほぼ同時代のジョン・セルウォールは、新旧ともに文学作品ですが、それでも旧版には、かれが政治論文を書いたという注記があります。目についたかぎりでは、トマス・ペインだけが、新版の方がくわしくなっています。しかし、そのばあいさえ、『農業的正義』はないのです。

一般に、新版の方がすくなくなっているという印象をうけるかもしれませんが、全体の量は 4 巻から 5 巻へと、ふえているのです。それなのに、なぜこういうことになるのでしょうか。それはこの書誌が、原典だけでなく研究文献をもふくむものだからで、研究の方は、時間の経過とともにふえていくので、その増加の犠牲になるのが、周辺部分あるいはふい研究（のりこえられたと考えられる）なのです。

18 世紀につよい図書館蔵書目録としては、もちろんクレスとゴールドスミスのそれをあげなければなりません。フォクスウェルの蔵書がロンドン大学とハーヴァード大学に二分され、それを核としてそれぞれの大学で補強された、ふたつのコレクションは、時代的にも地域的にも、かなりのひろがりをもっていますが、やはりもっとも強力なのは 18 世紀イギリスだといっていいでしょう。ただし、それぞれの目録のうち、ゴールドスミスは未完であるために索引がなく、クレスは 5 分冊の 1 冊ごとに索引がついているので、どちらもたいへん不便です。さいわいに、ふたつのコレクションをあわせたマイクロフィルムができたときに、全体の索引もできましたので、これを利用することができます²⁸⁾。

ロスチャイルド・ライブラリというのは、蔵書目録でみるかぎり二種類あって、もちろん各国にまたがる富豪一族ですから、愛書家がたくさんいてもおかしくはないのですが、フランスのジャム・ドゥ・ロトシルド²⁹⁾と、イギリスのナサニエル・メイヤー・ヴィクター・ロスチャイルド³⁰⁾の蔵書だけが、公刊目録をもっています。とくに後者はイギリス 18 世紀だけに限定して、1420 点をあつめたものですから、直接にいまのテーマにつながるわけです。このロード・ロスチャイルドは、たしかマートン・カレッジの物理学者だったとおもいますが、青年時代にこういう収集をはじめたのだそうで、カタログの序文の冒頭に、つぎのように書いています。「このコレクションは、1932 年に、私がケンブリジの学部学生であったときに開始された。私は自分が、ほとんどまったく名誉をきずつけるような諸理由で、科学者であるかわりに、一年ちかいあいだ普通学位のための勉強をしなければならない立場にあることに、気がついた。課目のひとつはイギリス文学で、私はそれを幸運にも、キングズカレッジのジョージ・ライラズンズにおしえてもらった。履習要綱は、アディソンの諸著作をふくんでいて、そのことがきっかけで私

は、ケンブリジのマーケット広場にあったデヴィッド書店でたまたま見つけた、かれの18世紀版著作集を、買うことになった。私がつぎに買ったのは、おなじくケンブリジの、ヘファー書店がもっていた、『感傷旅行』の初版であった。しばらくしてこのジョージ・ライランズが、ふたりでいっしょにロンドンにいて、18世紀の初版本をさがしてみようと提案した。われわれはロンドンにいて、いくつかの買物をした。そのひとつがこのカタログの1021番に記録されている。のこりは、愛書家たちがしばしば、その収集生活の初期に買うような種類の本である。カタログというものの作成者をなやませるもっとも困難な問題は、専門のビブリオグラファーたちの諸見解、あえていえば諸特異性癖に、いかに適応するかということであって、かれらはしばしば、書物がどのように記述されるべきかについて、強硬で対立的な見解をもっているのだ」。

わざわざこれを翻訳したのは、前半には戦前のケンブリジのエリート学生の生活がよくでているし、後半には、まえにおはなしした書誌のむずかしさが、指摘されているからです。ところで、こうしてあつめられたロスチャイルド・コレクションは、現在では残念ながら、まとまったコレクションとしては存在しないのだそうです。カタログがつくられたときは、ロスチャイルドがいたマートン・カレッジにあったのですが、そのご散佚したのか、カレッジまたは大学のほかの一般蔵書のなかにくみこまれてしまったのか、スラッファから「存在しない」という話をきいたときに、たしかめておくべきでした。

つぎにフランスにうつりますと、ここではまずシオラネスクの『フランス文学書誌』をあげなければなりません。この人はたしかルーマニア人で、16世紀、17世紀、18世紀の『フランス文学書誌』をだしています³¹⁾。16世紀は1巻で22106点、17世紀、18世紀は両方とも3巻で、収録点数は67472および67912です。littératureの概念の幅がひろいことは、イギリスやドイツのばあいとおなじですが、あとでおはなしするように、境界線附近については、とうぜんのことながら疑問があります。ケンブリジ・イギリス文学書誌とおなじく、原典とその諸版だけでなく、個別的な研究や背景についての研究もあげていますが、ちがうのは、分類なしに18世紀の個別著者をアルファベティカルにならべて、そのなかに二次的著作（いわゆる二次文献ではありません）をいれていることです。そのために、さしあたっての目的からすれば、つかいやすくなっています。この点ではCBELもNCBELも、たえず目次と人名索引をみなければならない不便があります。

このシオラネスクの『18世紀フランス文学書誌』をつかっているうちに、いくつかの疑問がでてきましたので、それをあげておきます。これはいわば偶然の発見でありまして、こういう発見をつみかさねていくのが、もっとも有効な改善の方法だろうとおもうのです。

まず、とりあげられた著者のなかに、ケネーやテュルゴがはいっているのに、バブーフやカロンヌは、はいっていません。政治家は除外するという原則があるわけではないし、テュルゴはともかくとしても、ケネーに文学的な作品はみあたりません。つぎに、外国語からの翻訳が、すべて訳者のところにはいっているために、さがしにくく、思想交流がつかめません。しかも、たとえば、Davilaのフランス内乱史のフランス訳 *Histoire des guerres civiles de France*, Amsterdam 1757 は、訳者としての Pierre-Jean Grosley (item 32660) と Mallet (42022) の項に、重出しています。

そのほか、François Chas の匿名著書らしいものが、Henri Montignot の項に M. C [has] et M. l'abbé d M...としてでている(47066) が、Chas の項にはない。Louis-Mayeul Chaudon, *Dictionnaire anti-philosophique*, Avignon 1769 (18828) は、François-Marie Coger の項にもあり(19966), Attribué parfois à l'abbé Nonnotte とされていながら、Nonnotte の項にはない。Jacques Necker, *De la Révolution française*, 2 vols., Paris 1797 (47923) は、ゴールドスミス (16555) では、N.P. 1796, 4 vol. となっている。François-Xavier Pagès, *La France républicaine* (48690) が、François Lagès

の項にもでていますが (35717), Lagès には、これ以外の著作がなく、生没年も不明であって、Pagès を Lagès と誤記したことによる重出ではないかとおもわれる。48690 は匿名出版ではなく、著者名も出版地もページ数も記入されているのに、35717 は、初版と同年の再版で、著者名、地名がないことになっていて、ページ数もしめされていない。誤記がどの段階でおこったのかはわからないが、未確認情報の鵜のみによるのかもしれない。さらに、Isaac Pinto 1715–1787 の著書が 1776 までしかないということにも、疑問がある。

7 万ちかい項目ですから、いまあげたくらいのミスは 1 万分の 1 で、許容限度内にはちがひありませんが、全体としてはそうであっても、個々の研究者＝利用者にとっては、特定の 1 点だけが必要だということもありうるわけで、そのばあいには、すべてか無かということになります。

フランス 18 世紀については、1680–1715 という限定はありますが、コンロンの『フランスにおける啓蒙の世紀への序曲』という、6 巻の出版年表がでています³²⁾。18 世紀は、はじめの 15 年しか利用できないわけで、シオラネスクとの比較もできませんが、すくなくとも、翻訳が原著者名ででていることと、年代順排列であることとの、ふたつの点で、シオラネスクよりもつかいやすいといえます。

個々の思想家の著作目録は、シオラネスクのそれぞれの項目でさがせるわけですし、もともとシオラネスクの書誌は、個別著作目録にとってかわるはずのものでもあります。ただ、もちろん詳細については個別目録が必要になるばあいがあるでしょう。そういうものとしては、まえにドルバックの著作目録をあげておきました。そのほかに、多作で有名なヴォルテールについては、19 世紀末に、ベンジェスコによる 4 巻本の書誌があり³³⁾、ベスタマンその他によるその補足があります³⁴⁾。ビブリオテク・ナショナルのカタログから、ヴォルテールだけぬきだした 2 巻本の目録もあります³⁵⁾。ルソーやレイナルの書誌もあり³⁶⁾、まださがせばいくつかあるでしょう。まえにあげたコンロンの、18 世紀フランスのルソー論争書誌³⁷⁾ は、今回の作業にはまにあいませんでしたが、重要な貢献です。

しかし、この時期のフランス思想史の難問は、いうまでもなくフランス革命期の出版物の洪水です。17 世紀のイギリス革命のときに、ロンドンのトマスンという本屋がパンフレットをあつめ、それがブリティッシュ・ミュージアムにはいて、トマスン・コレクションとよばれるようになり、カタログも出版されたのですが、それに対応するビブリオテク・ナショナルのパンフレット・コレクションについてもカタログがあり³⁸⁾、とくに日本では、専修大学のベルンステン文庫が、それに比肩するとまではいえなくても、かなりの程度、それのかわりに利用できます。ただし、年表をつくる側としては、いたしかゆしで、選択のむずかしさが増大するわけです。

18 世紀のヨーロッパで、社会思想史、社会科学史上、重要な出版活動がおこなわれた国は、以上のほかに、オランダ、スイス、イタリアがあります。そのほかは北も南も、だいたい思想統制がきびしくて、啓蒙思想の浸透は、もちろん皆無ではないまでも、ずっとおくらせていました。こういう後進地帯を無視していいわけではなく、それどころかいろいろ重要な問題があるのですが、さしあたっては棚あげにしておきます。いまあげた三国についても、オランダとスイスは、フランス語圏またはドイツ語圏のなかで考えることができるので、イタリアだけがのこります。イタリアも、もちろんイギリス、フランス、ドイツにくらべれば後進的ですし、そのうえ、ドイツと同様に小邦分立状態だったために全体の状態がつかみにくいようです。全国統一カタログが完成していない点でも、ドイツと同様です。

しかしイタリアには、ほかの国にないような古典の復刻コレクションがありまして、経済学については、マルクスもつかったクストディ編の『政治経済学イタリア古典著作集』³⁹⁾、人文学とでもいうべきものについてはクローチェ編の『イタリア著作者集』⁴⁰⁾ で、前者が 50 巻、後者が 268 巻です。とくにクストディのリプリントには、各著者ごとにあたらしい書誌的序文がつけられたので、すくなくともそこに

収録されているかぎりの著者については、かなりくわしいことがわかります。

これを補足するものとしては、トリノのルイジ・エイナウディ研究所にある、イタリア共和国二代大統領ルイジ・エイナウディの蔵書目録⁴¹⁾と、「イタリア文学、歴史と原典」双書のなかの「イタリアの啓蒙思想家たち」7巻⁴²⁾があります。前者は、エイナウディの全蔵書ではなく、学術書とでもいうべきものだけを収録したのですが、われわれにとってはこの6258点だけでいいのです。まえにのべた小邦分立のために、このコレクションも北イタリア、とくにピエモンテにかたよっているかもしれず、ナポリなどでの調査による追加がのぞましいかもしれませんが、さしあたっては、公刊されたカタログとしては、これしかありません。

後者は、テキストは抜粋ですし、書誌的な序文や注も、精粗不統一ですが、補足的な資料にはなります。奇妙なことに、全7冊のうち3, 5, 7だけをあわせた索引が7巻についています。この3冊の担当者が同一グループ（フランコ・ヴェントゥーリのグループ）に属するからなのでしょう。イタリアの学界における派閥関係の反映です。なお、そのヴェントゥーリの大著『改革の18世紀』⁴³⁾は、現在までのところ、1500ページをこえる3巻で1776年にたっているの、あと1巻で完成するはずですが、これは、とくに書誌を意図しているわけではありませんが、注がかなりくわしいので利用できます。

ほかの国ぐにに足をふみいれるための模索については、一切省略しまして、18世紀ヨーロッパ思想史のなかの、主題書誌にすこし言及しておしまいにしましょう。例示するテーマは三つで、ユートウピア、アメリカ革命、フランス革命です。

18世紀のユートウピア物語の書誌は、小説に限定したもの⁴⁴⁾とフランスに限定したもの⁴⁵⁾があり、たとえば、後者にあるプラトンの『国家論』フランス訳は、前者にはありません。この種の書誌は、科学主義への疑問（科学から空想へ）や未来学の流行に刺激されて、まだほかにもでているはずです。

ふたつの革命については、直接に関係のある国、つまりイギリス、アメリカ、フランスの出版物の書誌があることは、とうぜん予想できるわけで、フランスについてはまえにも言及しましたし、イギリス、アメリカについてはアダムズの書誌⁴⁶⁾があります。問題は、ふたつの革命の国際的インパクトを、どうやってつかまえるかということです。イギリスにおけるフランス革命とか、ドイツにおけるアメリカ革命というような研究は、いくつかあるのですが、書誌としてつかえるものは、おおくはありません。

まず、アメリカ革命の、フランスへのインパクトについては、フェイの『合衆国関係フランス書の批判的書誌(1770-1800)』⁴⁷⁾があります。ドイツの方は、独立の書誌ではありませんが、ディッペルの『ドイツとアメリカ革命1770-1800』⁴⁸⁾の巻末に60ページの書誌がついています。

フランス革命は、イギリス、ドイツともにまとまった書誌がなく、ケリーの『イギリスのジャコバン派小説1780-1805』⁴⁹⁾の巻末や、ドローズの『ドイツのフランス革命』⁵⁰⁾の脚注ぐらしか利用できませんでした。前者はきわめてかぎられたものですが、後者はこまかいところにもよく目をくばっているとおもいました。アメリカへのインパクトも、とうぜん考えられていいのですが、書誌としてはみあたらず、イタリアへのインパクトが、アザールの『フランス革命とイタリア論壇1789-1815』⁵¹⁾で論じられて、60ページの引用文献リストがそえられています。このアザールやディッペルの本のように、書誌的附録をもつ研究書をさがしだすことが、書誌研究の重要な準備作業なのです。

これで大体おしまいますが、この年表の目的は、各国の出版物を年代順にならべることによって、相互の交流をふくめた比較思想史への手がかりを提供しようということ、文学の領域ではいくつかここらみられてきたのです⁵²⁾。しかし、これまでのところ、すべて文学にかたよりすぎ、しかも簡単すぎます。交流の指標としていばん重要な、翻訳についても、十分な研究はありません。ハーヴァードのクレス文庫にいたカーペンターも、そのことに気がついて、カードを集積しているといっていましたから、

いずれこの年表の改訂増補の作業のなかで、かれの意見をきくことになるでしょう。

これまでに全然あげなかったけれども書誌として利用できるものに、思想家の蔵書目録と、図書館などで特定の著者についておこなう展示の目録があります。それから、18世紀をこえて19世紀20世紀にはありますと、著者の数もふえますし、事件もふえますので、書誌もとうぜん増加します。事件の例をあげれば、チャーティズム、1848年革命、パリ・コムン、第一次大戦、ロシア革命、ドイツ革命、ファシズム、スペイン内乱、亡命、第二次大戦などがあり、これはただ、きりがいいことの例証とするにとどめ、あとはここにもってきた実物をごらんいただくことにして、おはなしをおわりたいとおもいます。

- 1) Hans Joachim Koppitz, Zur Bibliographie der deutschen Buchproduktion des 18. Jahrhunderts, *Zeitschrift für Bibliothekswesen und Bibliographie*, IX (1962), S. 18–30. Derselbe, Bibliographien als geistes- und kulturgeschichtliche Quellen im deutschen Sprachgebiet, *Börsenblatt für den deutschen Buchhandel*, Frankfurter Ausgabe, 19 (1963), S. 818–28. ただし、いずれもつぎのファビアン論文の注9による。
- 2) Bernhard Fabian, English books and their eighteenth-century German readers, in Paul J. Korshin (ed.), *The widening circle. Essays on the circulation of literature in eighteenth-century Europe*, University of Pennsylvania Press 1976. Derselbe, Heinsius, Kayser und die Bibliographie des achtzehnten Jahrhunderts, *Zeitschrift für Bibliothekswesen und Bibliographie*, XXVII (1980), S. 298–302. かんたんな説明として、水田洋「ハインジウスとカイザー」書誌索引展望6巻4号(1982年11月), p.24.
- 3) Mary Bell Price and Lawrence Marsden Price, *The publication of English literature in Germany in the eighteenth century*. Berkeley (University of California Press) 1934. Do., *The publication of English humaniora in Germany in the eighteenth century*. Berkeley (University of California Press) 1955. いずれも、シーハイにもトートクにもなく、ハワード・ヒルにある(752, 753)。前者のドイツ訳は、書誌を、1960年まで増補したそうだが、これも絶版である。*Die Aufnahme englischer Literatur in Deutschland, 1500–1960*. Bern und München (Francke) 1961.
- 4) Magdalene Humpert, *Bibliographie der Kameralwissenschaften*. Köln (Schroeder) 1937. Repr. Hildesheim (Gerstenberg) 1972. 収録点数は14040であるが、かなりこまかい分類をしているために、重複がおおい。
- 5) [Moses Hess], *Die europäische Triarchie*, Leipzig 1840 – Vorh.: Com. Bibl. Hamburg. Humpert 8100. このフンバートの記載は、シルバーナーの『モーゼス・ヘスの著作』とくいちがっていて、後者は刊年を1841とし、所蔵機関として、アムステルダム社会史国際研究所、ツューリヒ中央図書館、コロンビア大学図書館をあげている。
- 6) Christian Garve, *Abhandlung über die Verbindung der Moral mit der Politik, oder einige Betrachtungen über die Frage, inwiefern es möglich sey, die Moral des Privatlebens bei der Regierung der Staaten zu beobachten*. Breslau 1788.
- 7) Robert Mohl, *Die Geschichte und Literatur der Staatswissenschaften in Monographien Dargestellt*. 3 Bde. Erlangen 1858, unveränderter Abruck, Graz (Akademische Druck- u. Verlagsanstalt) 1960, Bd. 3, S. 355.
- 8) [Holbach, Freiherr von], *System der bürgerlichen Gesellschaft, oder natürliche Grundsätze der Sittenlehre und Staatskunst*. 2 Theile, Breslau 1788.
- 9) [Holbach, baron d'], *Système social. Ou principes naturels de la morale et de la politique. Avec un examen de l'influence du gouvernement sur les moeurs*. 3 tomes, Londres 1773.
- 10) Jerom Vercruysse, *Bibliographie descriptive des écrits du Baron d'Holbach*. Paris (Minard) 1971, item 1788E2.
- 11) Gero von Wilpert und Adolf Gühring (hrsg.), *Erstausgaben deutscher Dichtung. Eine bibliographie zur deutschen Literatur 1600–1960*. Stuttgart (Kröner) 1967.
- 12) Hugo Borst, *Bücher, die die grosse und die kleine Welt bewegten. Versuch einer Kulturgeschichte in Erstausgabe von 1749–1889 nach Erscheinungsjahren geordnet in Rahmen meiner Sammlung schön-*

- geistiger und wissenschaftlicher deutscher und fremdsprachiger Literatur*. Stuttgart (J. Fink) 1969.
- 13) E. K. Grotegut u. G. F. Leneaux, *Das Zeitalter der Aufklärung*. (Handbuch der deutschen Literaturgeschichte, zweiter Abteilung, Bibliographien herausgegeben von Paul Stapf, Band 6), Bern u. München (Francke) 1973.
 - 14) Gottfried Günther, Albina A. Volgina, Siegfried Seifert, *Herder-Bibliographie*. Berlin und Weimar (Aufbau) 1978. なお、フランスにおけるヘルダーについては、Henri Tronchon, *La fortune intellectuelle de Herder en France. Bibliographie critique*. Paris 1920. Réimpr. Genève (Slatkine Reprints) 1971.
 - 15) G. Averley, A. Flowers, F. J. G. Pobinson, E. A. Thompson, R. V. and P. J. Wallis (eds.): *Eighteenth-century British books. A subject catalogue extracted from the British Museum General Catalogue of Printed Books*. 4 vols. London (Dawson) 1979.
 - 16) F. J. G. Robinson, G. Averley, D. R. Esslemont and P. J. Wallis (eds.), *Eighteenth-century British books. An author union catalogue extracted from the British Museum General Catalogue of Printed Books and the catalogues of the Bodleian Library and of the University Library, Cambridge*. 5 vols. London (Dawson) 1981.
 - 17) 日本学術会議の Economic Series, Nos. 27, 30, 31, 32, 33 として 1961—64 に 5 分冊で出版され、はじめの 2 冊が経済学史学会によってリプリントされ、さらに 1980 に巖南堂から 5 分冊でリプリントされた。
 - 18) Ronald E. Crook, *A bibliography of Joseph Priestley 1733—1804*. London (The Library Association) 1966.
 - 19) A. T. Bartholomew, *Richard Bentley, D. D., a bibliography of his works and of all the literature called forth by his acts or his writings*. Cambridge 1908.
T. E. Jessop, *A bibliography of George Berkeley, with inventory of Berkeley's manuscript remains by A. A. Luce*. second edition (revised and enlarged), The Hague (Nijhoff) 1973.
G. Keynes, *A bibliography of George Berkeley, bishop of Cloyne. His works and his critics in the eighteenth century*. Oxford (Clarendon Press) 1976.
W. B. Todd, *A bibliography of Edmund Burke*. London 1964.
M. L. Pearl, *William Cobbett. A bibliographical account of his life and times*. London (O.U.P.) 1953. Reprinted Westport (Greenwood) 1971.
John Robert Moore, *A checklist of the writings of Daniel Defoe*. Indiana U. P. 1960, second edition, Hamden (Archon Books) 1971.
J. E. Norton, *A bibliography of the works of Edward Gibbon*. O.U.P. 1940.
L. Baumgartner, *John Howard, 1726—1790, hospital and prison reformer; a bibliography*. Baltimore 1939.
T. E. Jessop, *A bibliography of David Hume and of Scottish philosophy from Francis Hutcheson to Lord Balfour*. 1938. Reissued New York (Russell & Russell) 1966.
W. P. Courtney, *A bibliography of Samuel Johnson; revised and seen through the press by David Nicol Smith*. O.U.P. 1915.
R. Gimbel, *Thomas Paine: a bibliographical check list of Common Sense with an account of its publication*. New Haven 1956.
R. H. Griffith, *Alexander Pope, a bibliography*. 2 vols., Austin 1922—7.
Herman Teerink, *A bibliography of the writings of Jonathan Swift*. Second edition, revised and corrected by Dr. H. Teerink, edited by Arthur H. Scouten, Philadelphia (University of Pennsylvania Press) 1963.
A. T. Hazen, *A bibliography of Horace Walpole*. New Haven (Yale U.P.) 1948. Reprinted Folkestone and London (Dawson) 1973.
 - 20) Jerom Vercruyse, *Bibliographie descriptive des écrits du Baron d'Holbach*. Paris (Minard) 1971.
 - 21) Henry Higgs, *Bibliography of economics, 1751—1775*. Cambridge University Press.
 - 22) *Meditations on Seneca's Epistles written purely on the principles of Stoicism . . .* [MS].
Memoires sur la Grande-Bretagne et l'Irlande. Tr. par l'abbé Blavet, 2 vols., Paris 1776.

- Cf. Keitaro Amano, *Bibliography of the classical economics*. Part I, Tokyo 1961, p. 16.
- 23) Higgs. *op. cit.*, item 410.
 - 24) *The Vanderblue memorial collection of Smithiana*. Boston, Mass. (Harvard U.P.) 1939, p. 46.
 - 25) J. A. La Nauze, A manuscript attributed to Adam Smith, *Economic Journal*, 1945. この手稿は、1923年に、オーストリアのヴィクトリア公共図書館によって購入されていた。
 - 26) Edinburgh University Library, *Catalogue of the printed books in the library of the University of Edinburgh*. 3 vols., Edinburgh (T. & A. Constable) 1918–23.
 Glasgow University Library, *Catalogus impressorum librorum in bibliotheca universitatis glasguensis*. Labore et studio Archibaldi Arthur, Glasgow (A. Foulis) 1971.
 St. Andrews University Library, *Catalogus librorum in bibliotheca universitatis andreanae*. St. Andrews (R. Tullis) 1826.
 Advocates' Library, *Bibliothecae facultatis iuridicae catalogus secundum auctorum cognomina dispositus*. 2 vols., Edinburgh 1742–76. Pt. 3, 1807. [Pt. 3は未入手]
 Do.: *Catalogue of the printed books in the Library of the Faculty of Advocates*. 6 vols., Edinburgh 1867–78. [未入手]
 Signet Library, *Catalogue of the printed books in the Library of the Society of Writers to H.M. Signet in Scotland*. 3 vols., Edinburgh 1871–91.
 Philosophical Institution of Edinburgh, *Catalogue of the Library of the Philosophical Institution of Edinburgh*. Edinburgh 1857. Supplement, 1861.
 - 27) F. W. Bateson (ed.), *The Cambridge bibliography of English literature*. 4 vols., Cambridge U.P., 1940.
 G. Watson (ed.), *The new Cambridge bibliography of English literature*. 5 vols., Cambridge U.P., 1971–1977. 18世紀は新旧ともに Vol.2.
 - 28) University of London Library, *Catalogue of the Goldsmiths' Library of Economic Literature*. compiled by Margaret Canney and David Knott, Vol. I, printed books to 1800, Cambridge U.P., 1970. Vol. II, printed books 1801–1850, C.U.P., 1975.
 The Kress Library of Business and Economics, *Catalogue covering material published through 1776 with data upon cognate items in other Harvard libraries*. Boston (Baker Library, Harvard Graduate School of Business Administration) 1940.
 Do., *Catalogue supplement covering material published through 1776 with data upon cognate items in other Harvard libraries*. Boston 1956.
 Do., *Catalogue 1777–1817*, ... Boston 1957.
 Do., *Catalogue 1818–1848*, ... Boston 1964.
 Do., *Catalogue supplement (1473–1848)*, ... Boston 1967.
Goldsmiths'-Kress Library of Economic literature: A consolidated guide to segment 1 of the microfilm collection. 3 vols., Woodbridge, Conn. (Research Publication Inc.) 1976–78.
 - 29) Baron James de Rothschild, *Catalogue des livres composant la bibliothèque de feu M. le Baron James de Rothschild*. 5 vols., Paris 1884–1920.
 - 30) *The Rothschild Library. A catalogue of the collection of eighteenth century printed books and manuscripts formed by Lord Rothschild*. 2 vols., privately printed at the University Press, Cambridge 1954.
 - 31) Alexandre Cioranescu, *Bibliographie de la littérature française du seizième siècle*. Paris 1959, Genève (Slatkine Reprints) 1975.
 Do., *Bibliographie de la littérature française du dix-septième siècle*. 3 vols., Paris (CNRS) 1969.
 Do., *Bibliographie de la littérature française du dix-huitième siècle*. 3 vols., Paris (CNRS) 1969.
 - 32) Pierre M. Conlon, *Prélude au siècle des lumières en France. Répertoire chronologique de 1680 à 1715*. 6 vols., Genève (Droz) 1970–76.

- 33) Georges Bengesco, *Voltaire, bibliographie de ses oeuvres*. 4 vols., Paris 1882–90.
- 34) Eug. Ritter, Quelques notes sur la bibliographie de Voltaire par M. Bengesco, *Zeitschrift für französische Sprache und Literatur*, XIV (1892).
J. Malcolm, *Table de la bibliographie de Voltaire par M. Bengesco*. Genève, 1953.
T. Besterman, Quelques éditions anciennes de Voltaire, inconnues à Bengesco, *Genava*, II, 1954.
Do., Some XVIII century Voltaire editions unknown to Bengesco, *Studies on Voltaire and the eighteenth century studies*, VIII, 1959. シオラネスク 65006 は、雑誌名巻号ともに誤記。
- 35) Bibliothèque Nationale, *Catalogue général des livres imprimés de la Bibliothèque Nationale, Auteurs, tome CCXIV, Voltaire*. 2 vols., Paris (L'Imprimerie Nationale) 1978.
- 36) Jean Sélénier, *Bibliographie générale des oeuvres de J. -J. Rousseau*. Paris (PUF) 1950.
Anatole Feugère, *Bibliographie critique de l'Abbé Raynal*. Angoulême 1922, Genève (Slatkine Reprints) 1970.
- 37) Pierre M. Conlon, *Ouvrages français relatifs à Jean-Jacques Rousseau 1751–1799. Bibliographie chronologique*. Genève (Droz) 1981.
- 38) André Martin & Gérard Walter, *Catalogue de l'histoire de la Révolution Française*. 6 vols. in 7, Paris (Bibliothèque Nationale) 1936–69.
Andrè Monglond, *La France révolutionnaire et impériale, annales de bibliographie méthodique et description des livres illustrés*. Vols. 1–9 (1789–1812), Paris (Impimerie Nationale) 1930–63.
- 39) P. Custodi (cura), *Scrittori classici italiani di economia politica*. 50 vols., Milano 1803–16. Restampa, Roma 1956–69.
- 40) *Scrittori d'Italia, collana diretta da Benedetto Croce*. 268 vols., Bari 1910–1980.
- 41) Fondazione Luigi Einaudi-Torino, *Catalogo della biblioteca di Luigi Einaudi, opere economiche e politiche dei secoli XVI-XIX, a cura di Dora Franceschi Spinazzola*. 2 vols., Torino 1981.
- 42) *La letteratura italiana, storia e testi*, Volume 46, Tomo I–VII, *Illuministi italiani*, Milano e Napoli (Riccardo Ricciardi) 1958–65.
- 43) Franco Venturi, *Settecento riformatore*. 3 vols., Torino (J. Einaudi) 1969–79.
- 44) Philip Babcock Gove, *The imaginary voyage in prose fiction, a history of its criticism and a guide for its study, with an annotated check list of 215 imaginary voyages from 1700 to 1800*. London (The Holland Press) 1961 (1st published 1941).
- 45) Irmgard Hartig et Albert Soboul, *Pour une histoire de l'utopie en France, au XVIII^e siècle. Suivi de Irmgard Hartig, Essai de bibliographie*. Paris (Société des Etudes Robespierriistes) 1977.
- 46) Thomas R. Adams, *American independence. The growth of an idea. A bibliographical study of the American political pamphlets printed between 1764 and 1776 dealing with the dispute between Great Britain and her colonies*. Austin and New Haven (Jenkins and Reese) 1980.
Do., *The American controversy. A bibliographical study of the British pamphlets about the American disputes 1764–1783*. 2 vols., Providence and New York (Brown U.P. & the Bibliographical Society of America) 1980.
Lawrence Henry Gipson, *A bibliographical guide to the history of the British empire 1748–1776*. New York (Alfred A. Knopf) 1968.
- 47) Bernard Fay, *Bibliographie critique des ouvrages français relatifs aux États-Unis (1770–1800)*. Paris (Édouard Champion) 1925.
- 48) Horst Dippel, *Germany and the American Revolution 1770–1800, a sociological investigation of late eighteenth-century political thinking, translated by Bernhard A. Uhlenhof*. Wiesbaden (Franz Steiner) 1978.
Do., *American Germanica 1770–1800, Bibliographie deutscher Amerika-literatur*. Stuttgart 1976.
- 49) Gary Kelly, *The English Jacobin novel, 1780–1805*. London (O.U.P.) 1976.

- Allene Gregory, *The French Revolution and the English novel*. 1910. Reissued, Port Washington (Kennikat Press) 1965.
- 50) Jacques Droz, *L'Allemagne et la Révolution française*. Paris (PUF) 1949.
- 51) Paul Hazard, *La Révolution française et les lettres italiennes 1789–1815*. Paris 1910. Réimpression, Genève (Slatkine Reprints) 1977.
- 52) Antony Brett-James, *The triple stream. Four centuries of English, French and German literature 1531–1930*. Cambridge (Bowes & Bowes) 1953.
- Paul Van Tieghem, *Répertoire chronologique des littératures modernes*, publié par la commission internationale d'histoire littéraire moderne sous la direction de Paul Van Tieghem. Paris 1935.

(名古屋大学経済学部教授)

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 4*

発行所 東京都国立市中 2-1

一橋大学社会科学古典資料センター

発行日 1983 年 3 月 31 日

印刷所 東京都日野市多摩平 1-3-7

有限会社 新英商会
